

# 久古墳群

宗像郡宗像町大字河東所在古墳群の調査

宗像町文化財調査報告書

第 2 集

1979

宗像町教育委員会

# 久戸古墳群

宗像郡宗像町大字河東所在古墳群の調査

宗像町文化財調査報告書

第 2 集

1979

宗像町教育委員会

宗像市教育委員会

2609

## 序

相原古墳群発掘調査につづいて、秋、この久戸古墳群の調査に入りました。

東郷・田熊の平野を見おろすこの久戸の丘に、当初予測もなかった遺構が続々とあらわれました。

現地見学会や報告会が何度かもたれました。

多くの町民の方々が調査に参加下さいました。

有名な東郷・田熊遺跡を、釣川をはさんで対置しているこの久戸古墳群は、一部研究者の間で、おそらく学術上貴重な調査になるのではないかと推測されていましたが、文字通り、横穴をはじめ、様々な遺構、多様な出土品が出てまいりました。

古代宗像の解明について、これらの調査結果は、多くの資料を提供したとみています。

この調査にあたって、調査主任の高田一弘氏や酒井仁夫氏をはじめ県文化課の方々には大変なご苦勞をおかけしました。

また、相原古墳群調査以来の地元の方々には大変お世話になりました。

発掘調査が円滑に、しかも効果的に進捗したのは、ひとえに、直接発掘にたずさわった地元の方々の熱意と創意とヒューマンな人格にうらうちされた、すぐれたチーム・ワークだったと思います。

ここに深甚の感謝を申し上げます。

この書が、多くの方々の学習や研究の参考に供することができますよう願いたします。

昭和54年3月31日

宗像町教育委員会

教育長 竹原 瑛

## 例 言

1. この報告書は宗像町内土地区画整理事業に伴って破壊される予定の古墳群について実施した発掘調査の結果報告である。
2. 調査は昭和53年度に国庫補助を受けて宗像町教育委員会が実施し、福岡県教育委員会の援助を得た。
3. 遺物整理の指導については九州歴史資料館の横田義章氏及び福岡県教育委員会の岩瀬正信氏に願った。
4. 掲載した写真のうち図版1～3・14～17は九州歴史資料館の石丸洋氏が、他の遺構写真は酒井が撮影した。遺物写真は石丸氏の指導のもと、岡紀久夫、前田次郎、平島美代子3君が撮影した。
5. 掲載した地形及び遺構図は高田一弘氏、津崎弘信、中川研治、岡博晃君が実測し、津崎君と芦塚照子・平田春美君が浄書した。遺物は石山・酒井と中野恵子君が実測して整図した。
6. Ⅲ-10は石山勲が執筆し、他は酒井が執筆編集した。

## 本文目次

I 調査の経過	1
II 位置と環境	1
III 調査の概要	4
IV まとめ	43

## 図版目次

	本文参照頁
図版1 第10号墳横口部彩色	27
図版2 (1) 第11号墳玄室奥壁彩色	27
(2) 第11号墳玄室右側彩色	27
図版3 (1) 第11号墳玄室奥壁彩色	31
(2) 第11号墳玄室右側彩色	31
図版4 (1) 遺跡全景(西より)	1
(2) 遺跡全景(東より)	1
図版5 (1) 第1・2号墳全景(調査前)	4・6
(2) 第2号墳全景(調査前)	6
図版6 (1) 第1号墳全景	4
(2) 第2号墳全景	6
図版7 (1) 第3号墳全景	10
(2) 第3号墳玄門	10
図版8 (1) 第4号墳全景(調査前)	13
(2) 第4号墳全景	13
図版9 (1) 第5号墳全景	15
(2) 第5号墳主体部	15
図版10 (1) 第6号墳全景	16
(2) 第6号墳主体部	16
図版11 (1) 第7～9号墳全景(調査前)	20～26
(2) 第7号墳主体部	20
図版12 (1) 第8号墳主体部	22
(2) 第9号墳主体部	25

図版13 (1) 第 9号墳主体部内遺物出土状況	26
(2) 第 9号墳鉄刀出土状況	26
図版14 (1) 第 10号墳全景	27
(2) 第 10号墳玄門と閉塞石	27
図版15 (1) 第 10号墳石室全景	27
(2) 第 10号墳閉塞石	27
図版16 (1) 第 11号墳全景	31
(2) 第 11号墳閉塞石	31
図版17 (1) 第 11号墳玄門と閉塞石	31
(2) 第 11号墳右側壁と玄門隅	31
図版18 (1) 第 12号墳全景 (調査前)	33
(2) 第 12号墳全景	33
図版19 (1) 第 13号墳全景	36
(2) 第 13号墳玄室内人骨出土状況	37
図版20 (1) 第 13号墳玄室内人骨と鉄器出土状況	37
(2) 第 1・2号小石室全景	39
図版21 (1) 第 1号小石室全景	39
(2) 第 2号小石室全景	39
図版22 (1) 第 1号石棺内鉄器出土状況	41
(2) 第 1号石棺内人骨出土状況	41
図版23 各古墳出土土器	12・21・24・35
図版24 各古墳出土武器・装身具	6・9・26・29・32・37・39
図版25 (1) 第 6号墳出土短甲州板	19
(2) 第 9号墳出土三葉環 (左レントゲン写真)	26

## 挿 図 目 次

第 1 図 周辺遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)	2
第 2 図 遺跡地形実測図 (縮尺 1/2,000)	3
第 3 図 第 1号墳土層断面図 (縮尺 1/100)	4
第 4 図 第 1号墳石室実測図 (縮尺 1/40)	5
第 5 図 第 1号墳出土鉄鏡実測図 (縮尺 1/2)	6
第 6 図 第 1号墳出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)	6

第7图	第2号填石室实测图 (縮尺 1/40)	7
第8图	第2号填土层断面图 (縮尺 1/100)	8
第9图	第2号填出土铁铤实测图 (縮尺 1/2)	8
第10图	第2号填出土铁刀实测图 (縮尺 1/5)	9
第11图	第2号填出土须惠器实测图 (縮尺 1/3)	9
第12图	第3号填土层断面图 (縮尺 1/100)	10
第13图	第3号填主体部实测图 (縮尺 1/40)	11
第14图	第3号填出土铁刀实测图 (縮尺 1/5)	12
第15图	第3号填出土须惠器实测图 (縮尺 1/3)	12
第16图	第4号填土层断面图 (縮尺 1/100)	13
第17图	第4号填出土须惠器实测图 (縮尺 1/3)	13
第18图	第4号填主体部实测图 (縮尺 1/40)	14
第19图	第5号填土层断面图 (縮尺 1/100)	15
第20图	第5号填主体部实测图 (縮尺 1/40)	16
第21图	第5号填出土铁器实测图 (縮尺 1/2)	16
第22图	第6号填土层断面图 (縮尺 1/100)	16
第23图	第6号填主体部实测图 (縮尺 1/40)	17
第24图	第6号填出土铁刀实测图 (縮尺 1/3)	18
第25图	第6号填出土土師器实测图 (縮尺 1/3)	18
第26图	第6号填出土短甲・青銅板实测图 (縮尺 1/2)	19
第27图	第7号填土层断面图 (縮尺 1/100)	20
第28图	第7号填主体部实测图 (縮尺 1/40)	20
第29图	第7号填出土须惠器实测图 (縮尺 1/3)	21
第30图	第8号填土层断面图 (縮尺 1/100)	22
第31图	第8号填主体部实测图 (縮尺 1/40)	23
第32图	第8号填出土装身具实测图 (縮尺 2/3)	24
第33图	第8号填出土须惠器实测图 (縮尺 1/3)	24
第34图	第9号填土层断面图 (縮尺 1/100)	25
第35图	第9号填主体部实测图 (縮尺 1/40)	25
第36图	第9号填出土铁铤实测图 (縮尺 1/2)	26
第37图	第9号填出土铁刀实测图 (縮尺 1/5)	26
第38图	第10号填土层断面图 (縮尺 1/100)	27
第39图	第10号填石室平面实测图 (縮尺 1/30)	28

第40図	第10号墳石室実測図 (縮尺 1/30)	28~29
第41図	第10号墳出土鉄器実測図 (縮尺 1/2)	29
第42図	第10号墳出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)	30
第43図	第11号墳土層断面図 (縮尺 1/100)	31
第44図	第11号墳出土装身具実測図 (縮尺 2/3)	32
第45図	第11号墳出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)	32
第46図	第11号墳石室実測図 (縮尺 1/30)	32~33
第47図	第12号墳土層断面図 (縮尺 1/100)	33
第48図	第12号墳石室実測図 (縮尺 1/40)	34
第49図	第12号墳出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)	35
第50図	第13号墳土層断面図 (縮尺 1/100)	36
第51図	第13号墳主体部実測図 (縮尺 1/30)	36~37
第52図	第13号墳出土装身具実測図 (縮尺 2/3)	37
第53図	第13号墳出土鉄刀実測図 (縮尺 1/5)	37
第54図	第13号墳出土鉄鎌実測図 (縮尺 1/2)	38
第55図	第13号墳出土須恵器実測図 (縮尺 1/4)	38
第56図	竪穴式小石室実測図 (縮尺 1/40)	40
第57図	第1号竪穴式小石室出土鉄器実測図 (縮尺 1/2)	41
第58図	箱式石棺出土鉄器実測図 (縮尺 1/2)	41
第59図	箱式石棺墓・石蓋土塚墓実測図 (縮尺 1/40)	42

## 付 図

付図1 遺構配置図 (縮尺 1/300)

## I 調査の経過

昭和53年初頭宗像町大字河東字久戸 1,629の山林が地元組合による土地区画整理事業によって造成される事となり、造成計画は日本開発株式会社及び大成建設株式会社によって立案されつつあった。

発掘調査は宗像町の国庫補助事業として昭和53年11月13日から翌54年1月31日まで実施し、その後、図面及び遺物整理作業を行った。

調査関係者は次の通りである。

総 括	宗像町教育委員会	教 育 長	竹 原 瑛
		社会教育課長	吉 田 昭 生
庶務会計		社会教育係長	牧 田 俊 次
		社会教育主事	尾 山 清
調査担当		高 田 一 弘 (調査主任)	
調査指導	福岡県教育委員会	文化課調査一係長	宮小路 賀 宏
		主任技師	酒 井 仁 夫

なお、発掘調査に当っては大成建設株式会社、日本開発株式会社の援助を受け、また地元各方面の方々の多大な協力をいただき、円滑な作業を進めることができた。

## II 位置と環境 (第1・2図, 図版4)

宗像町内の埋蔵文化財の概観については先に宗像町文化財調査報告書第1集に記した通りである。

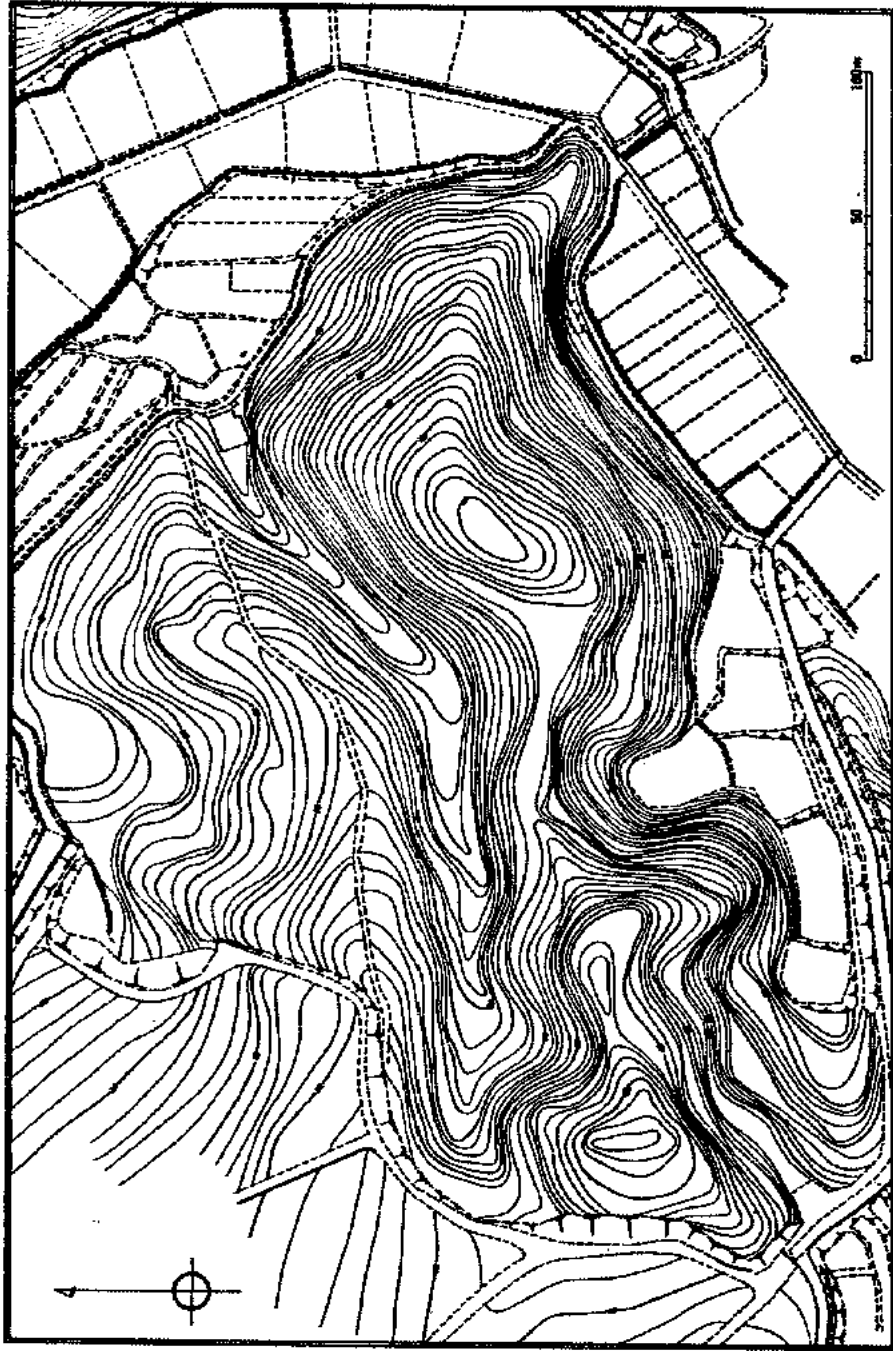
久戸古墳群は南の東郷古墳群と釣川を挟んで対峙し、相原古墳群の南西約 1.5kmに位置する。古墳ののる丘陵は東から入り込む谷によって南北に隔てられている。その南半丘陵が今回の調査対象地である。4号墳が最も高所に位置し、標高 54.45mである。南北両面は急傾斜をなし、西側へは調査区外の標高62mの最高位点まで緩やかに伸びている。この丘陵の狭い馬背状鞍部に古墳が点在している。

北丘陵は植林造成によって頂部を削平されている。その南斜面には小円墳数基が認められ、その下方斜面にはさらに横穴群が存在する。昭和54年度に発掘調査を予定している古墳群である。



第1図 周辺道路分布図 (縮尺1/25,000)

- |           |         |         |         |
|-----------|---------|---------|---------|
| 1.相原古墳群   | 2.輪元古墳群 | 3.久戸古墳群 | 4.東郷古墳群 |
| 5.スペットウ古墳 | 6.横山古墳群 | 7.須恵遺跡群 | 8.後曲古墳群 |



第2圖 森林地形實測圖 (縮尺1/2,000)

### Ⅲ 調査の内容 (付図1, 図版4)

調査によって検出した古墳は13基で、他に小壜穴式石室2基、石棺1基、石蓋土壇1基である。各古墳の内部主体はバラエティーがあり、壜穴系横口式石室5、横穴3、箱式石棺2、割竹木棺1、特殊組合せ木棺1、木蓋土壇1である。なお壜穴系横口式石室2の玄室内部には彩色が認められた。

#### 1. 第1号墳 (第3～6図, 図版5・6)

##### 1. 位置と現況

調査区西端の道路法面に接し、狭い鞍部西端に位置する中央に盗掘による陥没坑がある。標高 48.07m を最高所とするが、古墳とみかけられるほどの墳丘も流出して残していなかった。

##### 2. 墳丘 (第3図)

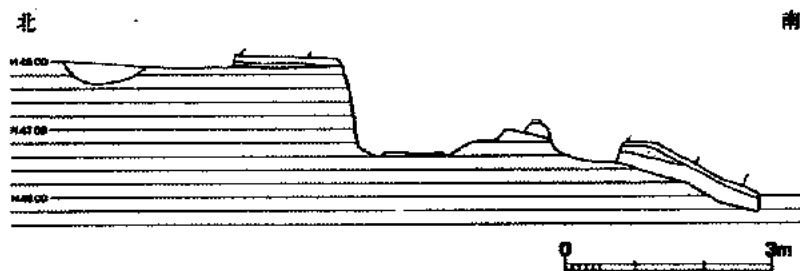
ほとんど流出しきり、南西斜面側でやや厚く残しているものの、北東及び南東側では地山整形によって盛土範囲を知りうるのみである。そのことによって、径8mの墳丘を持っていたと推定され、北東の山側に周溝をめぐるしたと思われる。

##### 3. 主体部 (第4図, 図版6-1)

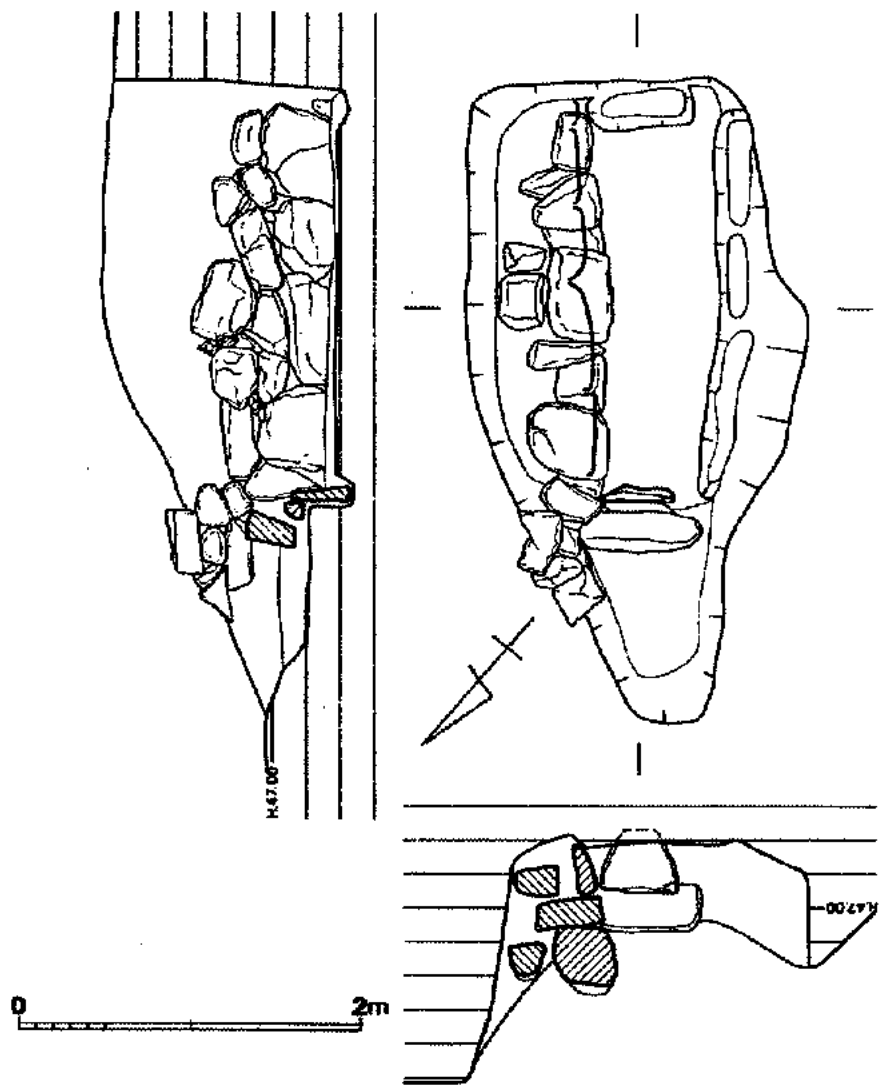
N-37°Wの略北西に開口し、尾根線に直交する壜穴系横口式石室を主体部とする。石材は北東側壁下部と閉塞石一部を残すのみで、他は全て抜き取られていた。北東壁と石材抜き痕によって玄室内法は約2.15×0.8mであったと推定される。前巾はやや狭くなろう。側壁は板状石を立てて腰石とし、上に横積み石を架している。床面は前庭部より一段低く、平坦である。前庭部との仕切り石は床面を掘り込んで板状石を立てて用いている。

前庭部は床面平坦で、側壁の玄室寄りには小礫を用いて補強している。

閉塞石は板石一枚と補材が残っていた。



第3図 第1号墳土層断面図 (縮尺1/100)



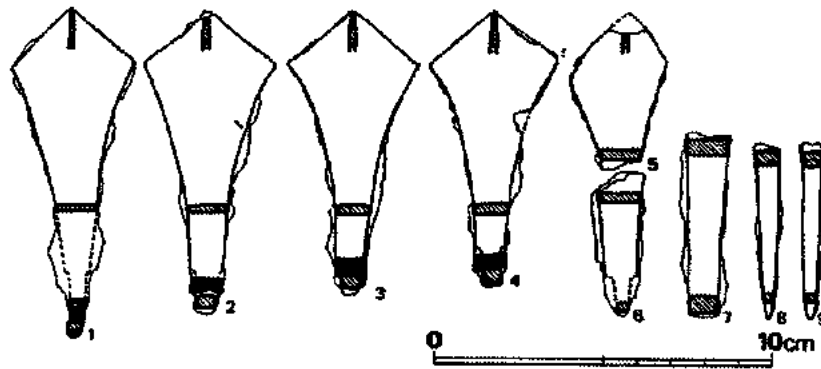
第4图 第1号墳石室実測図(縮尺1/40)

## 4. 出土遺物

玄室内堀土中から須恵器片と鉄鏃が出土した。

## 鉄鏃 (第5図)

定角式平根鏃である。刃部最大刃は 3.6~ 4.0cm で、断面は扁平なレンズ状である。茎の位置は深い錆に被われて正確には知り得ないが、矢柄木部の残存部によっておおよそ図のように考えた。



第5図 第1号墳出土鉄鏃実測図 (縮尺1/2)

## 須恵器 (第6図)

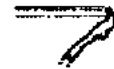
壺口縁部細片である。凸帯の後は鋭く、口唇部は内傾して、細くのびる。

## 5. まとめ

墳丘は径約 8 m の円墳で丘陵鞍部山側を切断している。

石室は狭長な玄室をもち、前庭部から一段低い床面をもっている。古いタイプの壑穴系横口式石室である。

出土遺物中の鉄鏃は平根式のみで、長頸鏃を含まない。須恵器片の型式からみても 5 世紀後半のものと考えられる。



第6図 第1号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

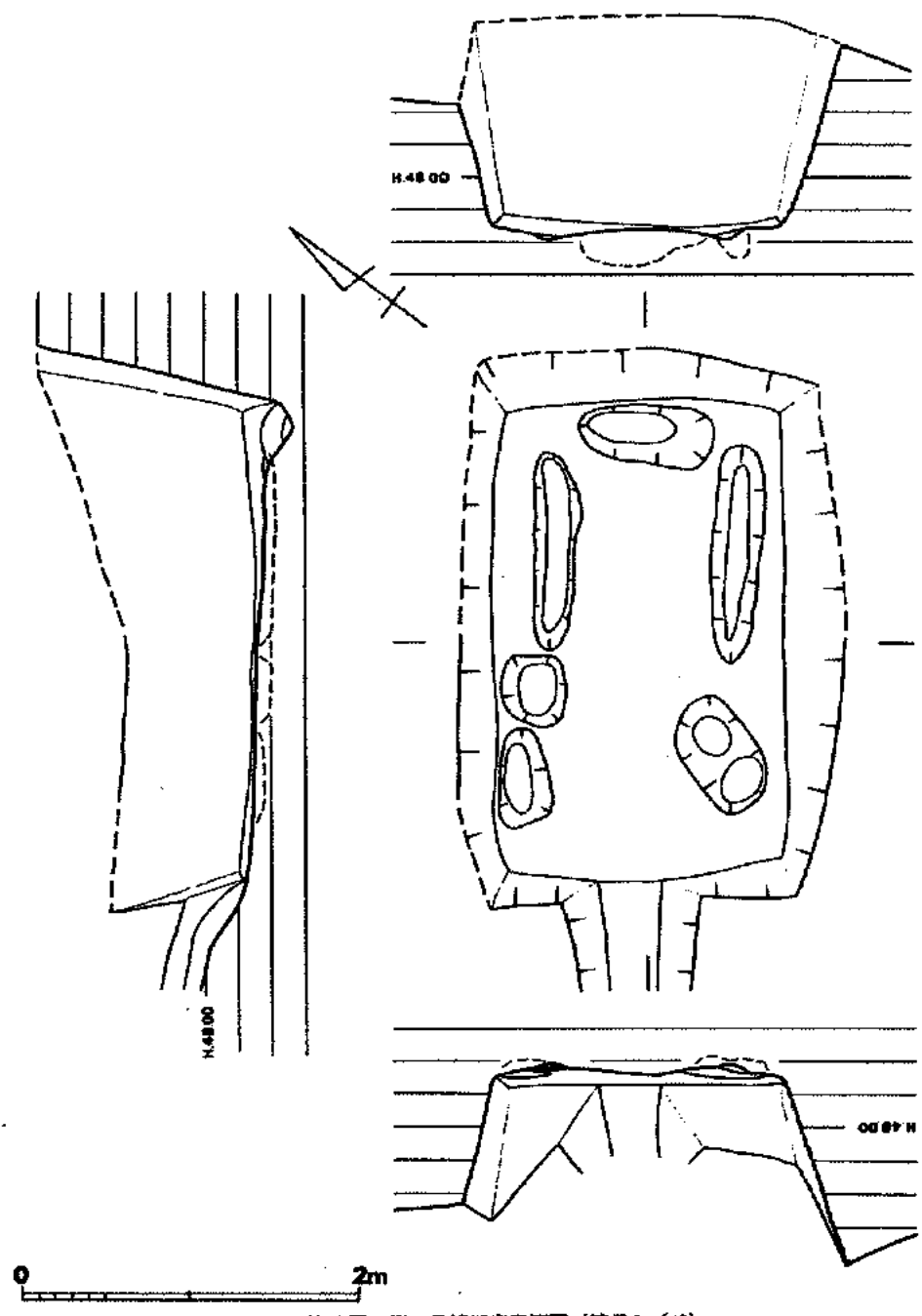
## 2. 第2号墳 (第7~10図, 図版5・6)

## 1. 立地と現況

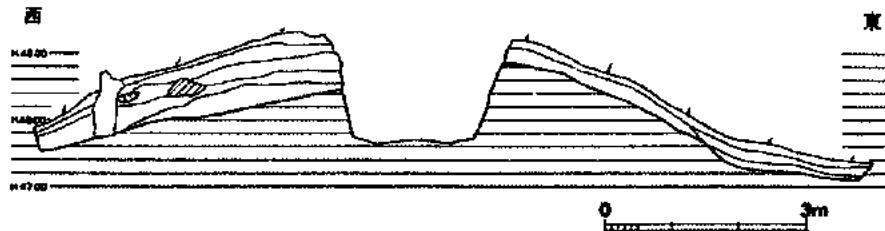
1号墳の北東に連続して丘陵鞍部に占拠している。標高 49.34m を最高所としている。墳頂部には空堀による陥没址が大きくあいている。

## 2. 墳丘 (第8図)

1号墳と同様墳土を丘陵斜面下方に多く流失し、見かけは径12mほどの範囲がふくれている



第7圖 第2号墳石室実測圖 (縮尺1/40)

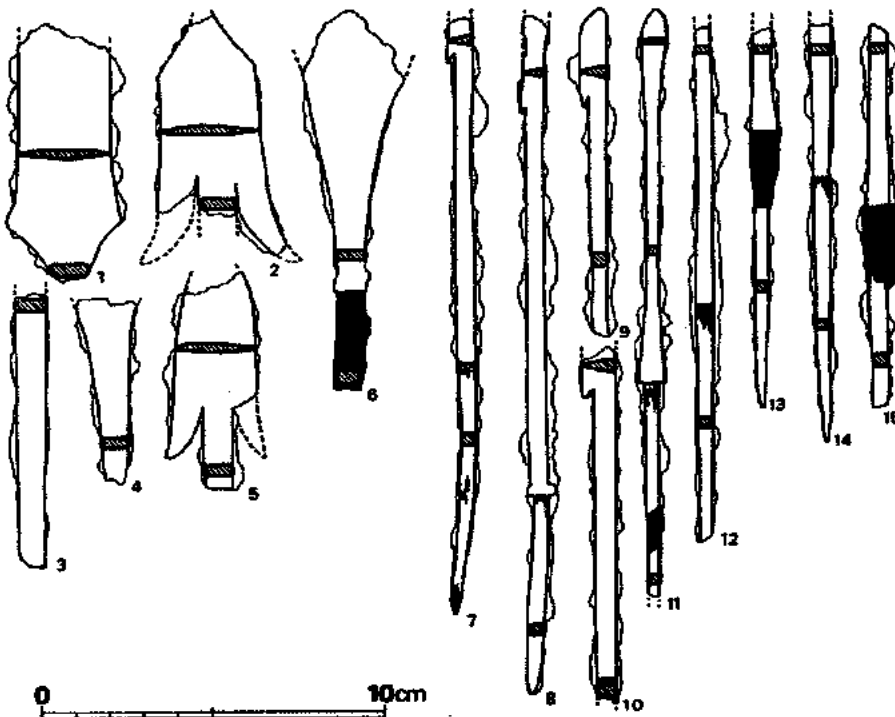


第8圖 第2号墳土層断面図 (縮尺1/100)

しかし各トレンチの最下層盛土と地山整形の範囲からみて径 9.0mの円墳であったと思われる。北東側の丘尾を切断している。墳丘築成について得られた知見は極く限られたもののみであった。

### 3. 主体部 (第7図、図版6)

S-53°-Wの略南西方向に尾根線と平行に開口する竪穴系横口式石室を主体部とする。但し石材は完全に抜き去られている。石材抜き痕からみれば、玄室内法は約 2.5× 1.0mで狭長な



第9圖 第2号墳出土鉄器実測図 (縮尺1/2)

石室であったと推定される。床面は奥壁側に傾斜している。

掘り方は底面中央で  $2.9 \times 1.74m$  の長方形を呈し、最深部で深さ  $1.4m$  ある。掘り方前面中央に長さ  $1.5m$  の狭く短い墓道が取り付け、地山を斜めに2段切り込んで作られている。

#### 4. 出土遺物

墳丘内から須恵器片が、玄室埋土中からは鉄鏃と鉄刀が出土した。

##### 鉄鏃 (第9図)

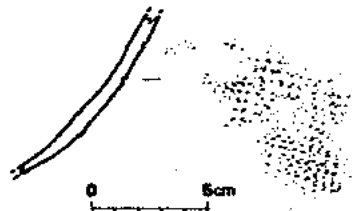
平根式 (1~6) と細根式 (7~14) があり、いずれも篋被を持つ。平根式の鏃のうち腸快をもつ定角式のものと同快のない定角式と図示しなかったが柳葉式のものがある。篋被は偏平で短い。細根式の鏃は片刃斧箭式と柳葉式がある。片刃斧箭式はいずれも腸快を持ち小形品 (7~9) と大形品 (10) がある。全長を知りうるものはないが、7の篋被部長は  $10.8cm$ 、茎長は  $12.57cm$  である。全長は  $21cm$  を越すものと思われる。9は片刃柳葉式で、鏃身端から篋被端まで  $11.0cm$  あり、全長は  $17cm$  を越すと思われる。

##### 鉄刀 (第10図、図版24)

大小2振が出土した。いずれも破損が甚しく全長を知りうるものではない。1は切先と茎部中間を欠失している。推定される刃部長は  $76.4cm$  である。刃部巾は根部近くは  $4.0cm$ 、切先近くで  $3.0cm$  である。茎部は端部有段である。2は細身の小刀である。全長は不明である。刃部巾は一定して  $2.3cm$  である。切先は鋒部も僅かに彎曲する。

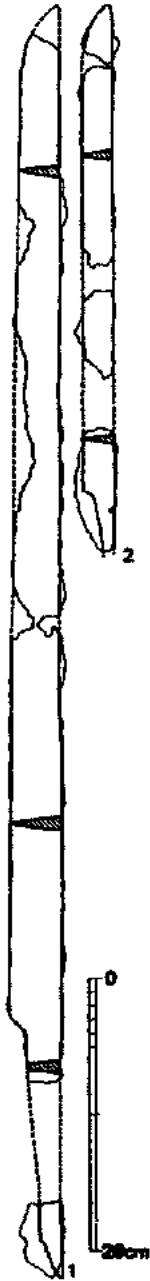
##### 須恵器 (第11図)

丸味をもったカーブを持つ。外面を粗い布目圧痕状の叩きを施し上に数条の沈線を引いており縄文紋に類似する。さらに下部には粗い方形刻みの叩きを施している。内面はスリ消し調整である。焼成は軟質で、淡青灰色を呈している。胎土は密である。甕の底部付近の破片であろう。



第11図 第2号墳出土須恵器実測図 (縮尺  $1/3$ )

第10図 第2号墳出土鉄刀実測図 (縮尺  $1/5$ ) ▶



## 5. まとめ

墳丘は径約9mの円墳で、丘陵鞍部の山側を切断している。石室は狭長な竪穴系横口式石室であったと思われる。

出土した須恵器甕片は特殊な叩きが施されており、胎土、焼成からみて輸入陶質土器かと思われる。1号墳と同様5世紀後半のものと考えられる。

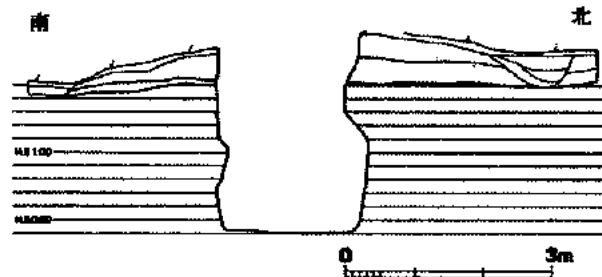
## 3. 第3号墳 (第12~15図, 図版7)

### 1. 立地と現況

4号墳の南に接し、あたかも4号墳の張り出し部の様相を呈した部分があり、トレンチを掘り下げた結果、独立した一つの古墳であると判明した。丘陵鞍部からやや東斜面にかかる位置にある。

### 2. 墳丘 (第12図)

径6.8mの小円墳であり、墳丘背後の丘陵鞍部にかけて巾2.6m前後の馬蹄状溝が掘られている。北側トレンチにおいても巾狭な馬蹄溝が認められ、4号墳丘産土と思われる土層を切っている。



第12図 第3号墳土層断面図 (縮尺1/100)

墳丘産土は単純層をなし、主体部掘削の余土を単に運び上げたのみだと思われる。

### 3. 主体部 (第13図, 図版7)

S-45°-Eの南東に開口する横穴を主体とする。玄室・羨道と墓道よりなる。

玄室は長さ1.9m、巾1.85mの内法で、奥壁は直線的で、側壁との隅は明瞭な稜をなすのに対し、前壁は丸くカーブする。崩壊が著しいので天井部の形状は不明である。但し、高さは玄門部残存地山上面レベルを考慮すれば、1.8m以上は考え難い。

羨道は床面高55cm、巾62cm、方形孔が長さ50cmにわたってあけられ、入口に高さ1.1mの前面壁を削り出している。

墓道は4.5m分検出した。崩壊は前広がりになる。また玄門脇でも巾を1.13mと広げ、前庭様に地山を削っている。

閉塞石は礫積みで、玄門に接した外側の床面を若干掘り下げた上に積まれていた。

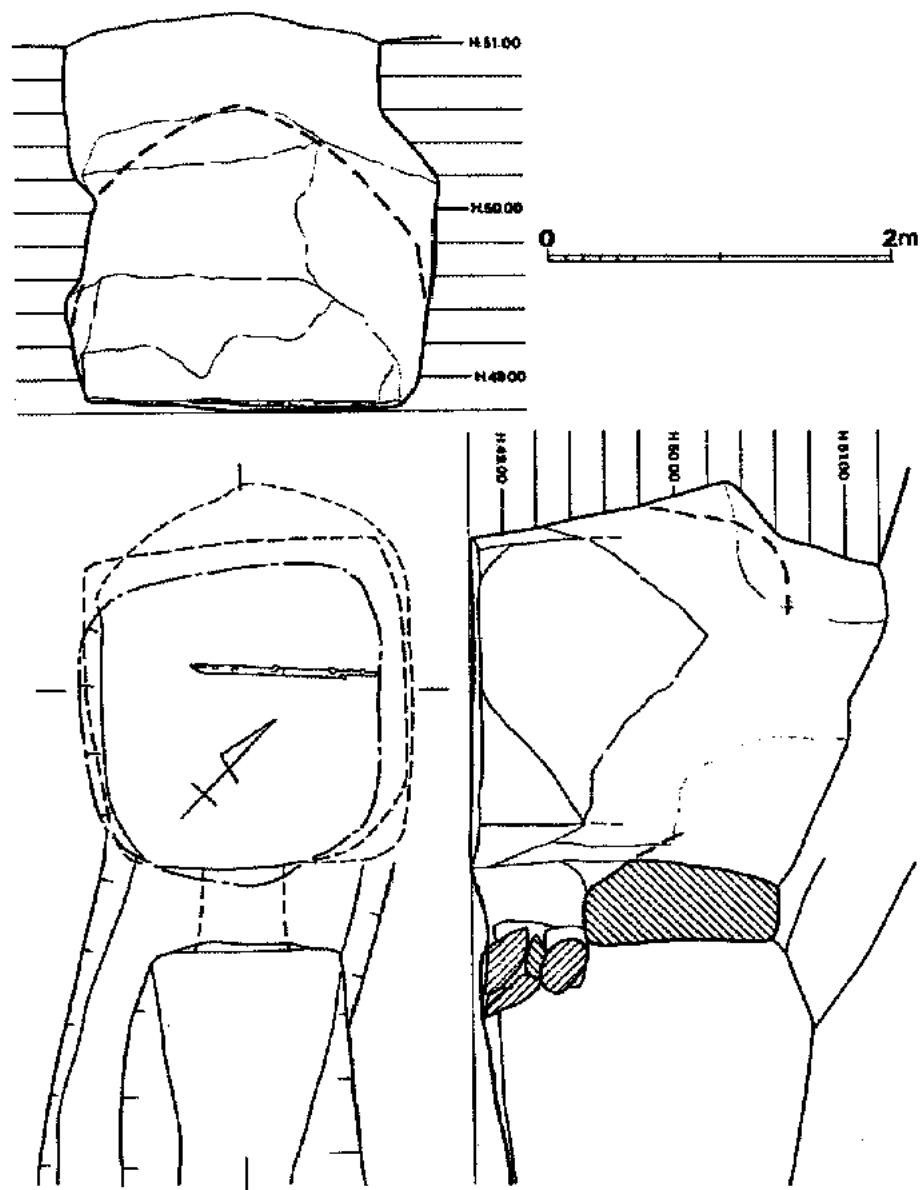


图13图 第3号墳主体部实测图 (縮尺 1/40)

#### 4. 出土遺物

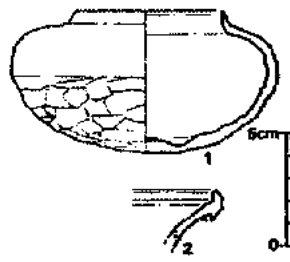
墓道からと墳丘中から須恵器が、玄室から鉄刀が出土した。

##### 鉄刀 (第14図、図版24)

玄室床面中央に奥壁と平行に置かれていた。完形品であったが、調査期間時に切先を紛失した。推定全長 111.6cm、刃部長90.2cmの長刀であり、直刀である。巾は胴部近くで4cm、刀部中端よりしだいに巾を減じる。厚さは胴部9mm、切先近くで7mmである。茎は巾をほぼ一定させ、端部平坦である。目釘孔は2孔、間距離は心寸12.8cmである。

##### 須恵器 (第15図)

1は墓道出土の埴である。口縁部は短く内傾し、端部は尖る。扁球形で肩が張る。胴部下半から底部にかけては細かな停止ヘラ削りを施している。硬質で、胎土中は僅か小砂粒を含む程度で良質である。口径6.4cm、最大径11.7cm、器高6.3cm。2は雙口縁片である。1号墳出土例に類似するが口唇部は太く丸味をもって立つ。



第15図 第3号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

#### 5. まとめ

墳丘をもつ横穴という点で8号、13号墳と共通する。墳丘径は約6.8mである。背後の丘陵鞍部に馬蹄形溝を掘っている。同様の例は行橋市竹並遺跡及び山口県山口市朝田1号墳にみられる。

主体部の横穴は玄室と短い羨道・玄室近くが広がる墓道よりなる。購入らねばならない低く狭い羨道は壑穴系横口式石室の古いタイプを思わせるものがある。なお天井部の形状は頂部の尖るドーム式と思われる。

墓道より出土した埴は胴下部から底部にかけて広く停止ヘラ削りをした調整法は古様相を想わせるが、全体のプロポーションは6世紀中葉以前のものと考えられず、追葬時の葬品であろう。墳丘より出土した雙口縁部小片は1号墳出土例よりは丸味を帯びてきており、新しいものと考えられる。よって当古墳は6世紀初頭に築成され、6世紀中葉まで使用されたものと思う。

※ 竹並遺跡調査会「竹並遺跡」1974

※※ 山口県教育委員会「朝田墳墓群1 木崎遺跡」1976

第14図 第3号墳出土鉄刀実測図 (縮尺1/5) ▶



## 4. 第4号墳 (第16~18図, 図版8)

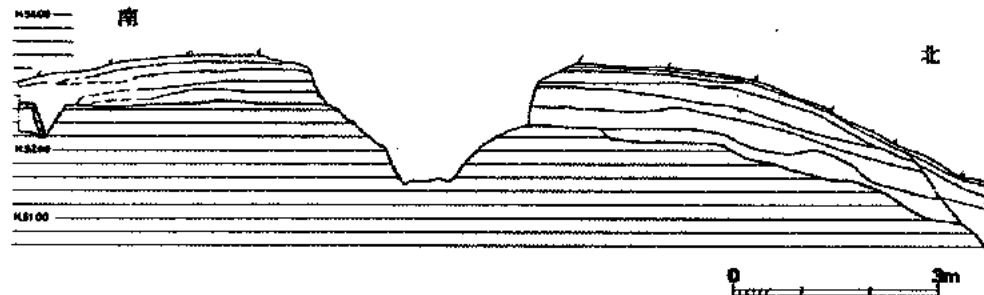
### 1. 立地と現況

丘陵中の最高所狭部に位置する。また丘陵の西半では最も広い中心的な位置に当る。墳頂は盗掘を受けて陥没しており、標高 54.45m を最高所とする。

### 2. 墳丘 (第16図)

墳丘の築成はまず地割内の表土を削ぎ、地山の削り出しによって周溝を作り出している。規模は削り出し部まで含めて長径17.5m、短径16.5mの円墳である。

盛り土は礫混りの地山掘削土を用いており、現状では周囲の斜面に流出し、周溝をも被っている。3号墳周溝に切られていた土層はこの流土であろう。版築等の細部は不明である。なお墳丘下より石棺1基が検出された。



第16図 第4号墳土層断面図 (縮尺1/100)

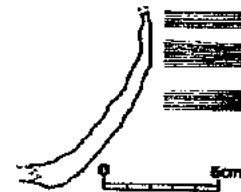
### 3. 主体部 (第18図)

主体部は箱式石棺である。墓床は上面楕円形の二段掘りである。石棺床面から墓床上面までは1.0mあり、十分に蓋材を被える深さがある。

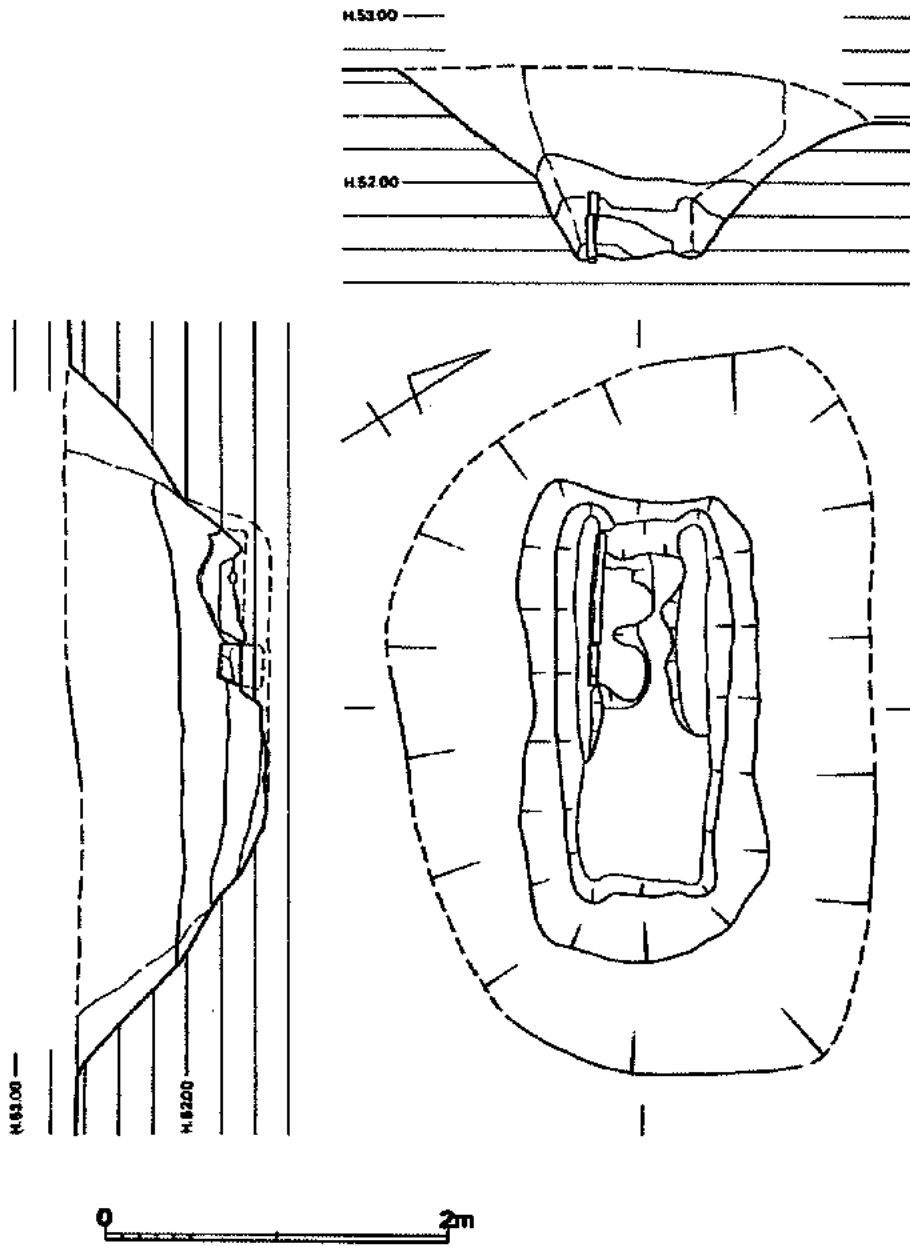
棺材は側壁2石の下縁を残すのみであり、荒々しい盗掘の様が想われる。石材抜き痕によってみるならば、棺材は小口板を挟み込む組み合わせをしており、内法は推定 1.8×0.5m である。残された棺材の厚さは約5cmであり、決して大きいとはいえない。

### 4. 出土遺物 (第18図)

墳丘中の下層石棺直上から1点の須恵器片が検出された。当古墳に伴うものとは考えられず、後世の擾乱による混入と当然考えられる。平版と思われる。胴部下半に数段にわたってカキ目調整がみられる。



第17図 第4号墳出土  
須恵器実測図  
(縮尺1/3)



第18圖 第5号墳土層断面図 (縮尺1/100)

## 5. まとめ

調査区内最高所に占地する長径17.5m、短径16.5mの円墳である。周溝を南側をのぞいてめぐらし、中央に二段廻り墓壇を穿っている。墓壇の深さは1.0mあり、主体部の箱式石棺蓋材まで充分被える深さである。盛土は四周に流失していた。また版築等の細部については検出し得なかった。

主体部の箱式石棺は盜掘に会い破壊されていた。内法は1.8×0.5m程度であろう。

検出された唯一の遺物は墳丘中出土の須恵器片のみである。

箱式石棺を内部主体とする円墳では近くに津屋崎町奴山5号墳がある。削り出し部を含めて径32mの大円墳であり、5世紀前半と考えられている。また玄海町上高宮古墳も同時期のものと考えられている。

また3号墳との切り合い関係から考慮しても5世紀代以前ということは首肯され、占地等からみても当古墳群中最古の4世紀末に比定できよう。

※ 津屋崎町教育委員会「奴山5号墳」1978

※※ 島田寅次郎『石葬と土葬 古墳と副葬品』『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書13』1939

## 5. 第5号墳 (第20~21図, 図版9)

### 1. 立地と現況

4号墳に近接した東方で、東西方向に伸びる丘陵の狭い鞍部に占地している。見かけは50cm程の高まりをもっており、頂部は平坦であった。標高47.25mを最高所とする。

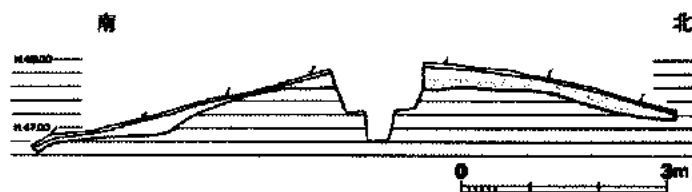
### 2. 墳丘 (第19図)

南北に急斜面を控え、墳土の大半は流失し去り、極く薄い盛土を残すのみであった。墳丘築成に際して地山整形をしており、標高上位の西方には巾1.4mの周溝を、南方には同巾の平坦面をしつらえている。復元される墳丘径は約8mである。

### 3. 主体部

(第20図, 図版9)

N-86°-Eの略東西方向に主軸をもつ土壇墓である。地山を約80cm掘り盛めた二段廻りで、掘り方上端は2.18×1.3mの長方形、棺

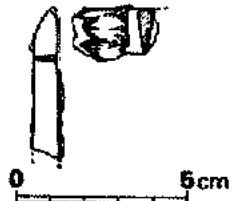


第19図 第5号墳土層断面図 (縮尺1/100)

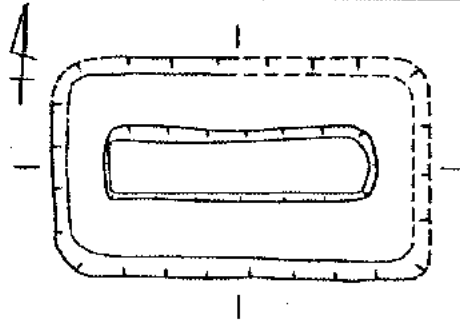
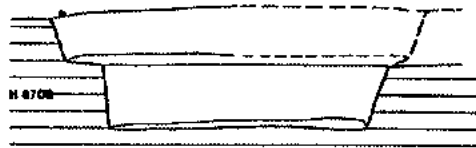
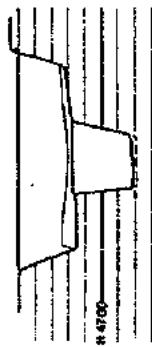
内法は  $1.5 \times 0.3\text{m}$  の隅丸長方形である。調査中に一切の石材は見当らず、木蓋土壇であったと思われる。

4. 出土遺物

(第21図)



第21図 第5号墳出土  
鉄器実測図  
(縮尺  $1/2$ )



第20図 第5号墳主体部実測図 (縮尺  $1/40$ )

棺内西隅床面から刀子片が出土した。1は細身で刃部巾  $8.5\text{mm}$  である。2はやや太く、刃部巾が  $13.5\text{mm}$  あり、基部に柄木質を残している。

5. まとめ

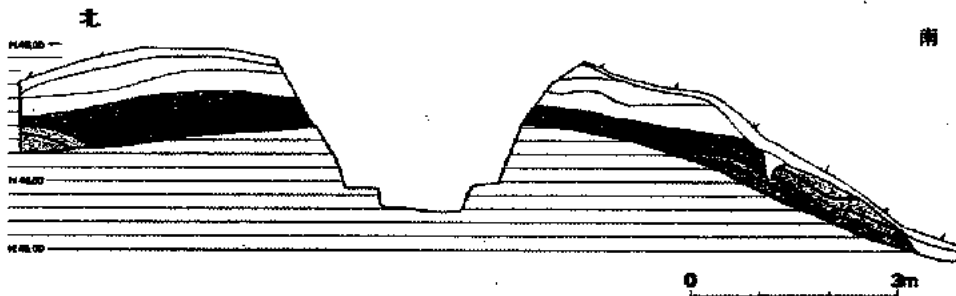
径  $8\text{m}$  の円墳で山側に周溝をしつらえている。主体部は二段掘り木蓋土壇基である。

時期については特定すべき理由はなく、少なくとも単独葬古墳という観点から6世紀中葉より下るものではないといえるのみである。

6. 第6号墳 (第22~26図, 図版10)

1. 立地と現況

5号墳の位置から南西-北東方向の尾根線へと転じ、当古墳の位置から南へ向う小尾根が派



第22図 第6号墳土層断面図 (縮尺  $1/100$ )

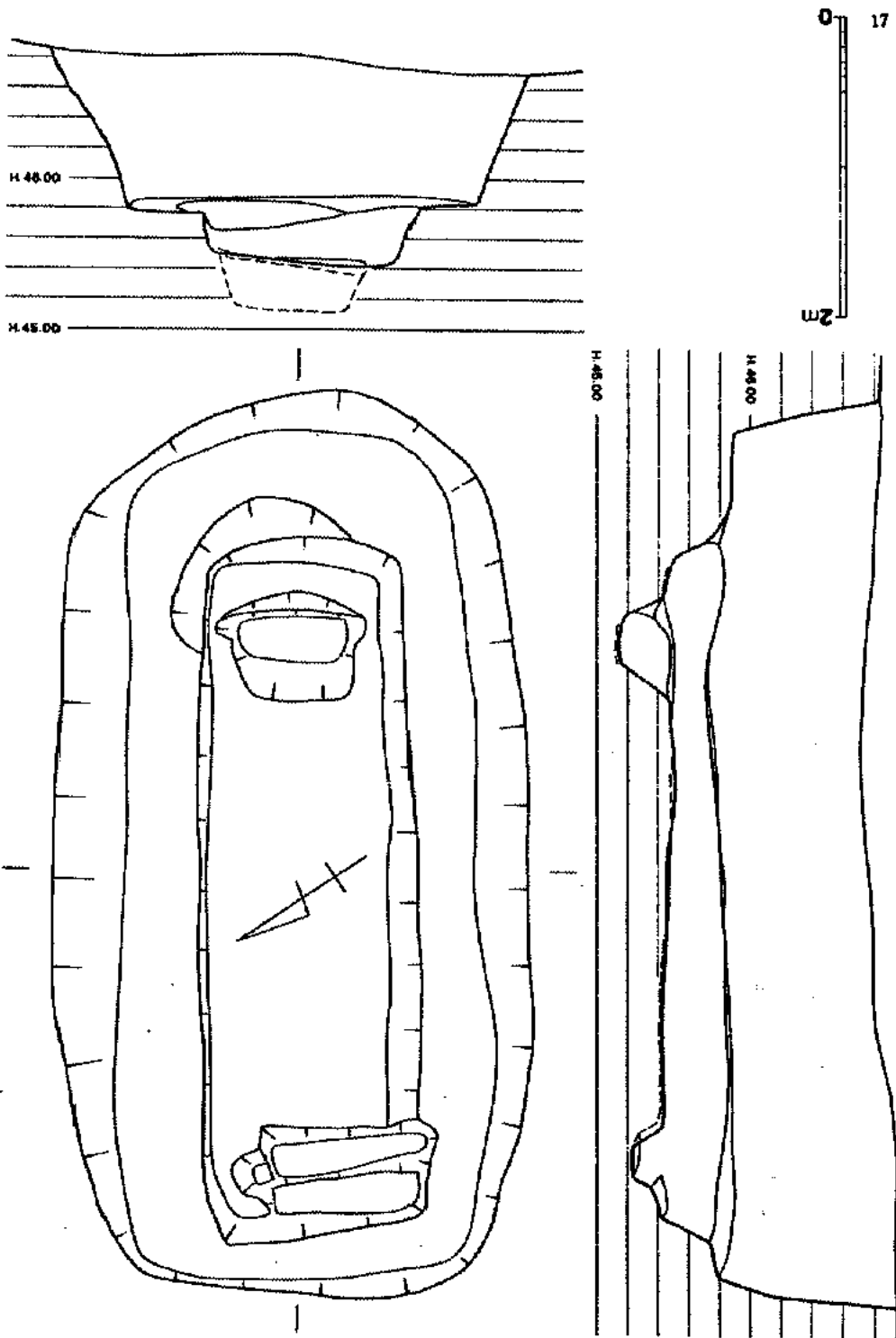


图23 第6号墳主体部実測図 (縮尺1/40)

出する。この二つの尾根分岐点の鞍部はやや広がり、その中央に6号墳が占地する。最高所の標高は47.50mで、墳頂には盜掘による陥没坑がある。

## 2. 墳丘 (第22図)

墳丘築成に際しての地山整形は表土を剥ぎ取る程度の地割が行われている。墓域掘削の余土をこの地割内周縁に盛り、主体部埋置後に周縁盛土内側を埋め、さらに上部を盛り上げるという3段階の工程が看取される。西側の丘陵鞍部は切断されていたと思われる。

墳丘は径17.5mの円墳である。

## 3. 主体部 (第23図, 図版10)

N-55°-Wの略南西方向に主軸をもつ箱式石棺である。二段掘り墓坑の上面は5.9×3.05mの隅丸長方形である。棺材は蓋石2枚が盜掘に際して遺棄されていた他まったくなく、床面に小口板抜き痕を認めるのみである。その痕跡からみるに棺内法は約3.15×0.65mの長方形であったと推定される。墓坑の深さは1.3mあり、蓋石を充分埋納できる深さである。

## 4. 出土遺物

墓坑内より盜掘に際して持ち出され遺棄された甲冑銅板と鉄刀片が、墳丘内から土師器が出土した。

### 鉄刀 (第24図)

細片であり、全長を知り得ない。関部近くで刃部巾3.1cm、厚さ0.5cmである。



第24圖 第6号墳出土鉄刀実測図 (縮尺1/3)

### 三角板革繩短甲 (第26図1~18, 図版25-1)

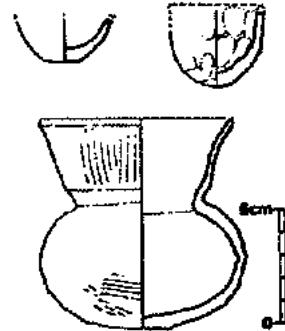
地板の破片のみで、完形板はない。1~7は腰板で、巾は2.5~3.0cmである。9・10は腰板と三角板が縫じられている。10の三角板は端部を欠損しているが、上辺9.7cm、中央巾3.8cmと小さく、注目される。11・12の三角板は上辺が若干カーブしており、押付板に接する下段の地板かと思われる。13・14は胸、15は裾、16は胸前、17は脇下の各部分であり、18は押付板である。

### 三角板革繩冑 (第26図19・20)

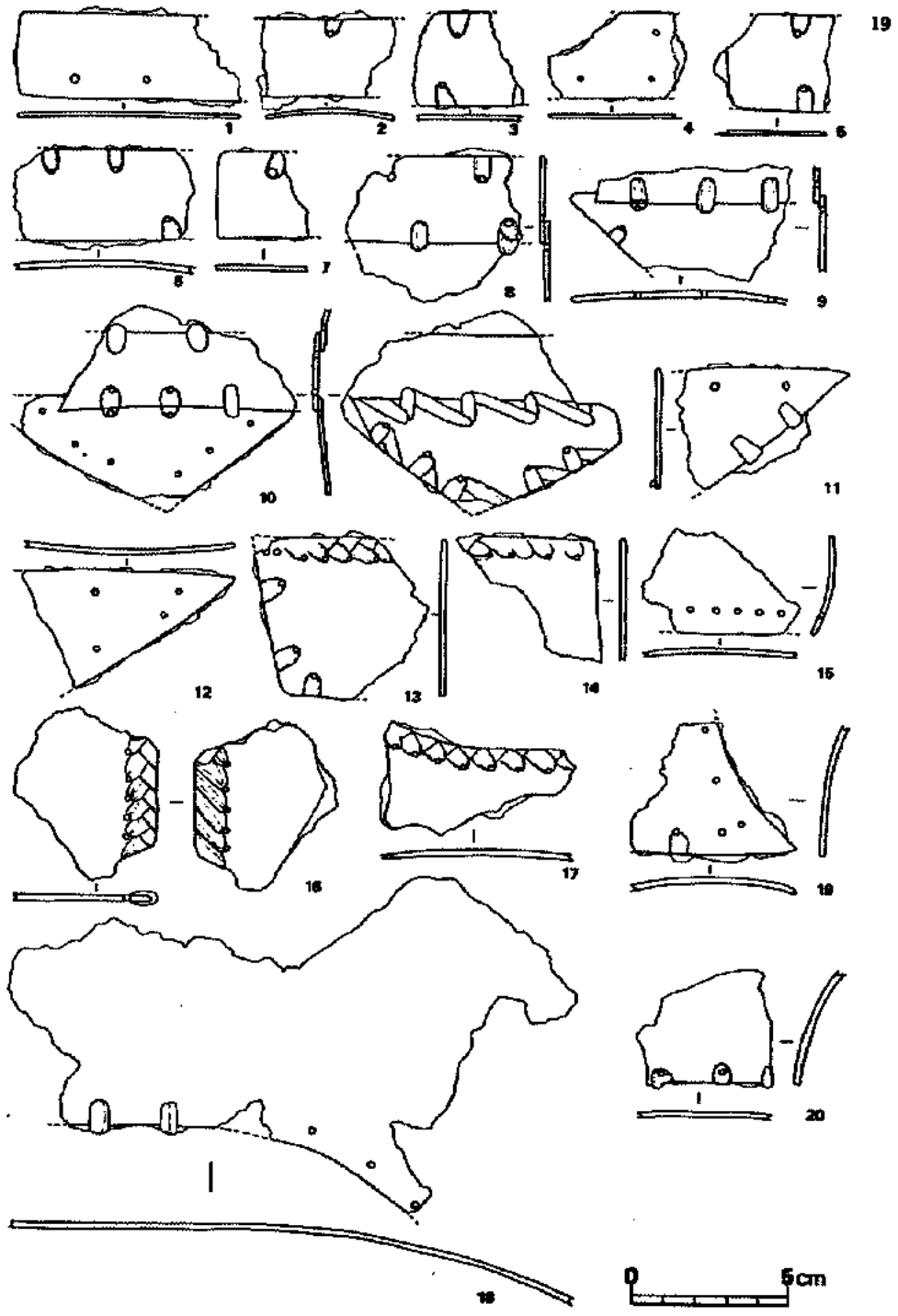
カーブから考えて冑の三角板と考えた。

### 土師器 (第25図, 図版23)

1・2は小形の手づくね土器で底部は丸く、口縁部は直立する。内外面に指痕が認められる。3は埴で、扁球胴部と長い口縁部をもつ。口縁部は外傾したのち僅かに立ち、端部近くで再び外彎する。外面は刷毛目調整したのちへらで研磨している。口径8.3cm、胴径9cm、器高9.2cmであ



第25圖 第6号墳出土土師器実測図 (縮尺1/3)



第26圖 第6号墳出土短甲 - 背板板突側面 (縮尺1/2)

る。胎土は精良である。

### 5. まとめ

4号墳と同じく箱式石棺を主体部とする円墳であり、墳丘径、石棺内法は4号墳より大きい。出土した土師器と鉄器からみて4号墳とほぼ同期の4世紀末～5世紀前半の古墳と考えられる。

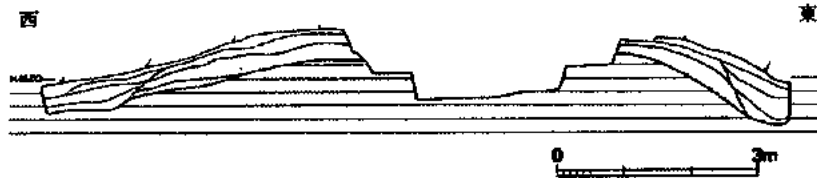
## 7. 第7号墳 (第27～29図, 図版11)

### 1. 立地と現況

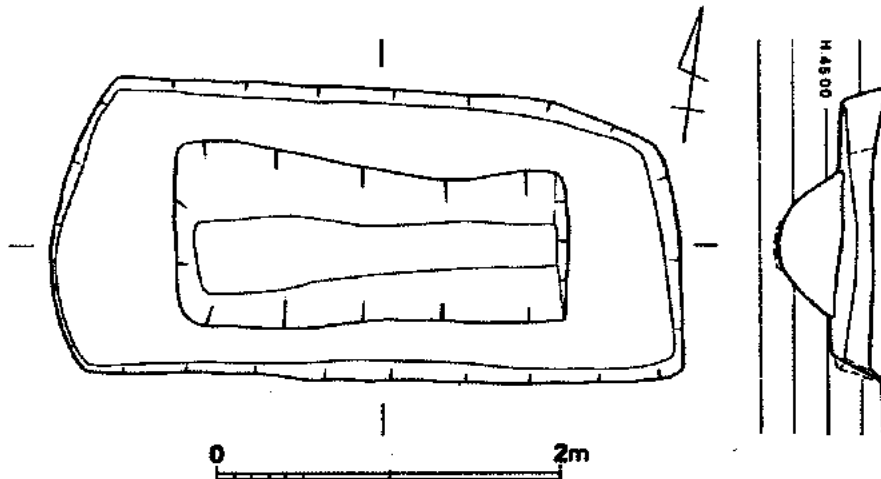
南に向け派出する小丘陵鞍部の根元に位置し、6号墳の南東に接している。丘陵は北東から南東にかけてはかなりの傾斜をもって下がっている。標高は46.10mを最高所としている。

### 2. 墳丘 (第27図)

自然傾斜の急な東側が特に墳丘の流失が著しい。東西で浅い周溝が認められ、南側に伸びていたと思われる。



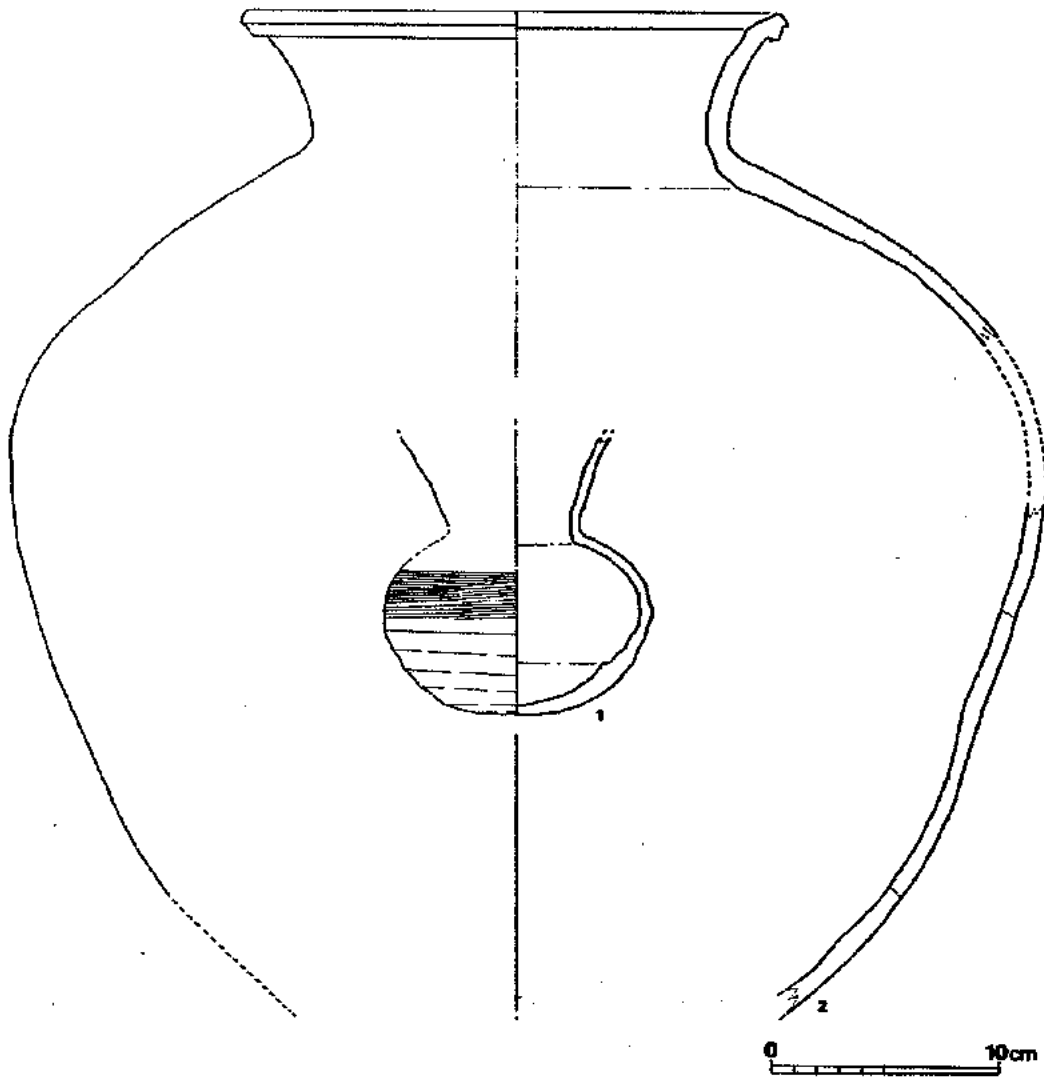
第27図 第7号墳土層断面図 (縮尺1/100)



第28図 第7号墳主体部実測図 (縮尺1/40)

### 3. 主体部 (第28図、図版11-2)

N-82°-Eの略北東に主軸をもつ小形の割竹形木棺直葬である。墓域は二段掘りで、上面は中央長3.65m、中央巾1.7mの不整形プランである。その中央に棺掘り方がある。棺底長は2.07mである。断面はU字形であるが、上開きしており、棺と掘り方の中には裏込めされていたと考えられる。床面近くのカーブを上部にも求めて復元するならば、外径約70cmの棺があったものと推定される。蓋・身の合せ口は掘り方の中段平坦面に等しく、また棺上面は掘り方上面にほぼ等しい。



第29図 第7号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

#### 4. 出土遺物

周溝中から須恵器が出土したのみである。

##### 須恵器 (第29図)

埴と甕がある。埴は口縁部を欠損している。長く、外上方へ直線的に開く頸部と球形胴部をもつ。胴部は中央から下はヘラ削り調整、上部はカキ目調整を施している。最大胴径は11.8cm。

甕は口縁部が太く、外面に三角凸帯をもつ。端部は外面が鋭く凸出するのに対し、内面は丸味をもっている。胴部外面には粗い平行叩きを施し、上にカキ目を若干加えている。内面の同心円叩きを部分的にスリ消している。硬質である。口径23.6cm、最大胴径約45.3cm。

#### 5. まとめ

主体部は小形ながら割竹形木棺という古式葬例を踏襲しているが、周溝中出土の須恵器を見る限り5世紀前半に属すると思われる。

### 8. 第8号墳 (第30~33図, 図版12)

#### 1. 立地と現況

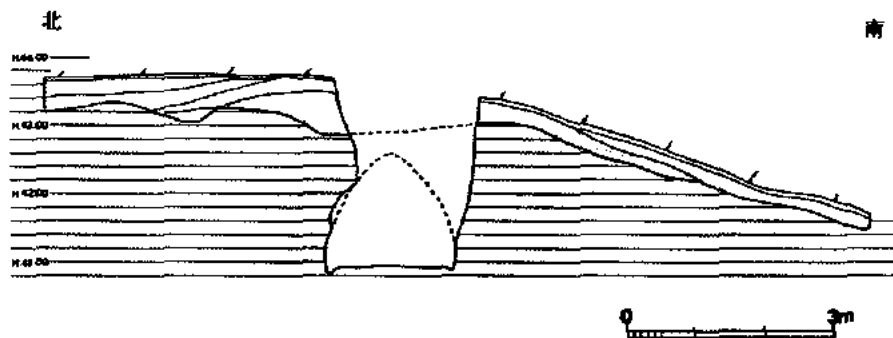
7号と9号の間の狭い鞍部上に位置し、調査前も、それとはっきりわかる墳丘を持っていた。墳頂部は平坦で、標高 44.51m を最高所としていた。

#### 2. 墳丘 (第30図)

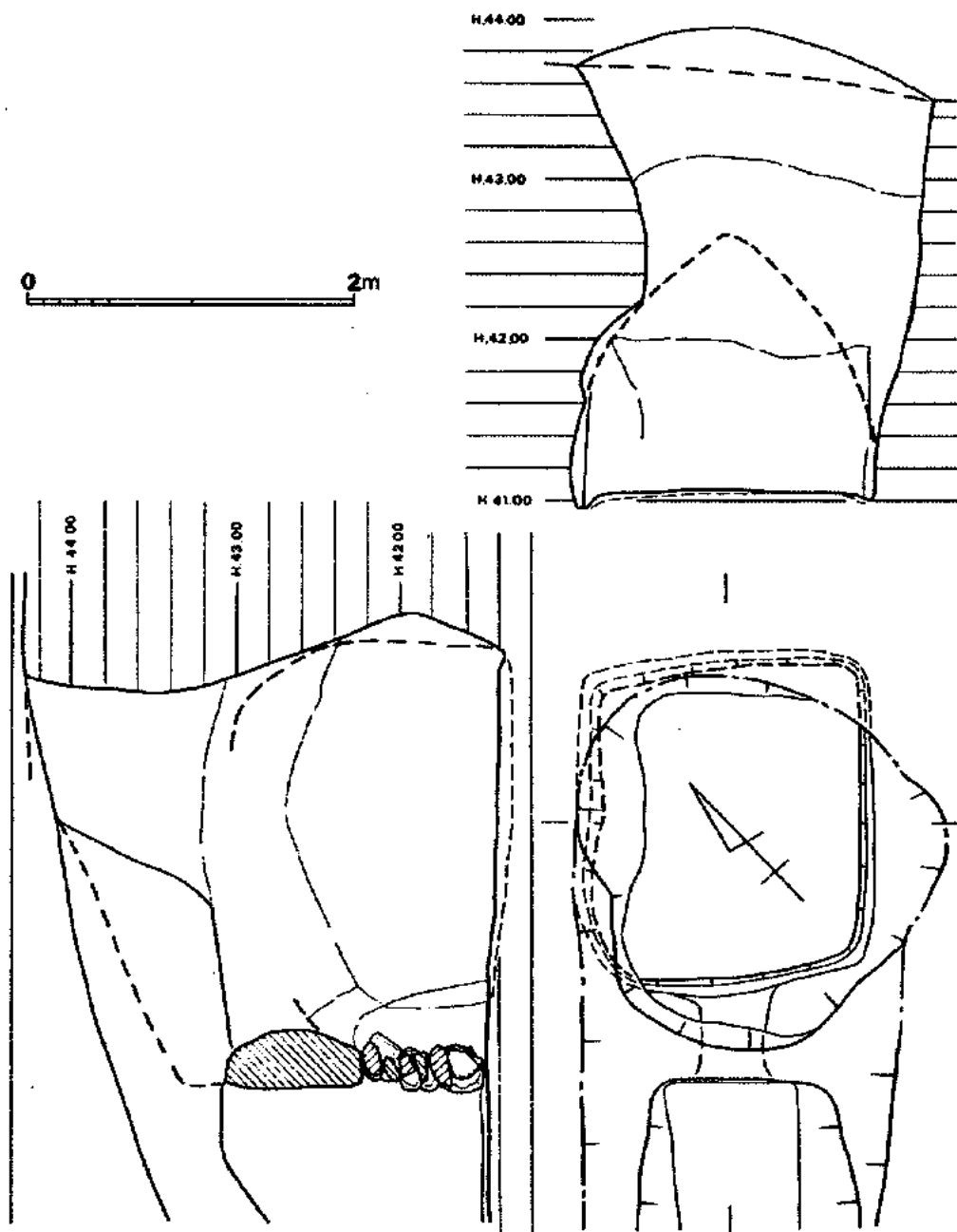
古墳築成に際して最初に天井部上に  $3 \times 3.5 + \alpha$  の平坦面を削り出している。その後主体部を掘削し、その余土を天井部上平坦面上に積んでいる。また、奥壁側には最大巾約 2.5m の馬蹄形溝を掘っている。主体部掘削と溝掘削の工程上の前後関係は明らかではない。墳丘は径 6.7m である。

#### 3. 主体部 (第31図, 図版12-1)

S-43-Wの路南西に開口する横穴である。



第30図 第8号墳土層断面図 (縮尺 1/100)



第31圖 第8号墳主体部実測図 (縮尺1/40)

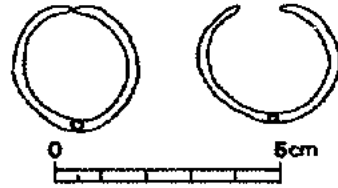
玄室の床面はやや歪んだ隅丸方形で、中央部長2.15m、同巾1.85mである。四周に排水溝がめぐっている。崩壊の度合いが甚しいため側壁中部から天井部にかけての断面形状は明確ではない。推定すれば、羨道部残存上面レベルが玄室天井部レベルより高いはずがなく、床面高は最低1.65mとなる。また側壁の残存部カーブを床面から1.65mの高さまで結び崩壊線端部に接し、1.65mという高さは最高限度ともなる。よって、横断面形は中央の尖るドーム形であったと想定される。玄門部は中央巾47cm、中央長54cmで、高さは78cmである。床は玄室のそれより若干高い。玄門部は一系列の角礫をもって床面から天井まで閉塞されていた。墓道の床面は奥巾80cm、中央巾40cmあり、その後前面に開いて約4m伸びて塚面に至っている。

#### 4. 出土遺物

主体部の玄室床面より耳環が、奥壁側周溝より須恵器が出土した。なお、周溝出土の須恵器は当古墳の使用期間を示すものか否か、判然としない。

##### 耳環 (第32図)

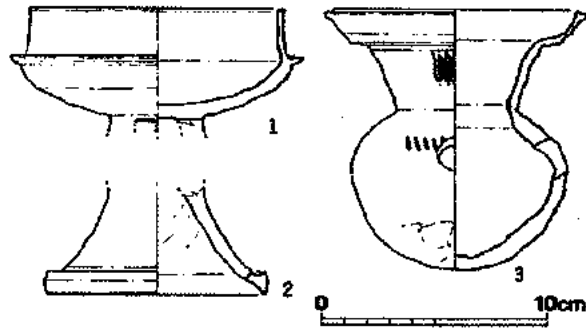
銀製である。細身大形で、外径2.8cmである。



第32図 第8号墳出土装身具実測図 (縮尺2/3)

##### 須恵器 (第33図)

高杯及び甃である。高杯身部の1と脚部の2は同一個体と思われる。立ち上りは直立し、2.2cmの高さがある。端部は内傾する平坦面をもつ。受部は小さく外上方に張り、脚部は短く一段長方形透しをもつ。裾部は短く端部は鋭く直立する。2の甃の口縁端部は部厚く、内窪みする面をもち、内縁は鋭い。頸部は太く細かく、外面に櫛描波状文をめぐらしている。球体部はやや肩が張り、櫛刺突文を一段配している。



第33図 第8号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

#### 5. まとめ

主体部及び周溝の掘削土を玄室部上に盛り上げて墳丘を築成している。主体部は単室の横穴で、玄室は横断面で先端の尖るドーム状を呈していたと考えられる。

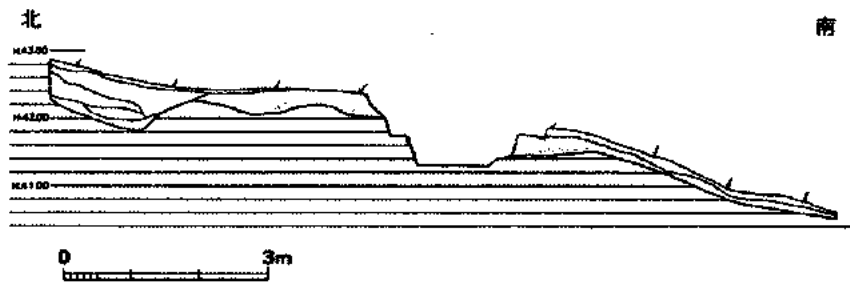
玄室内出土の耳環は細身の大型品で、後述する13号墳出土例と近似する。

周溝中出土の須恵器は5世紀代後半のものであるが、当古墳の使用時期を示すものかどうか疑点がある。

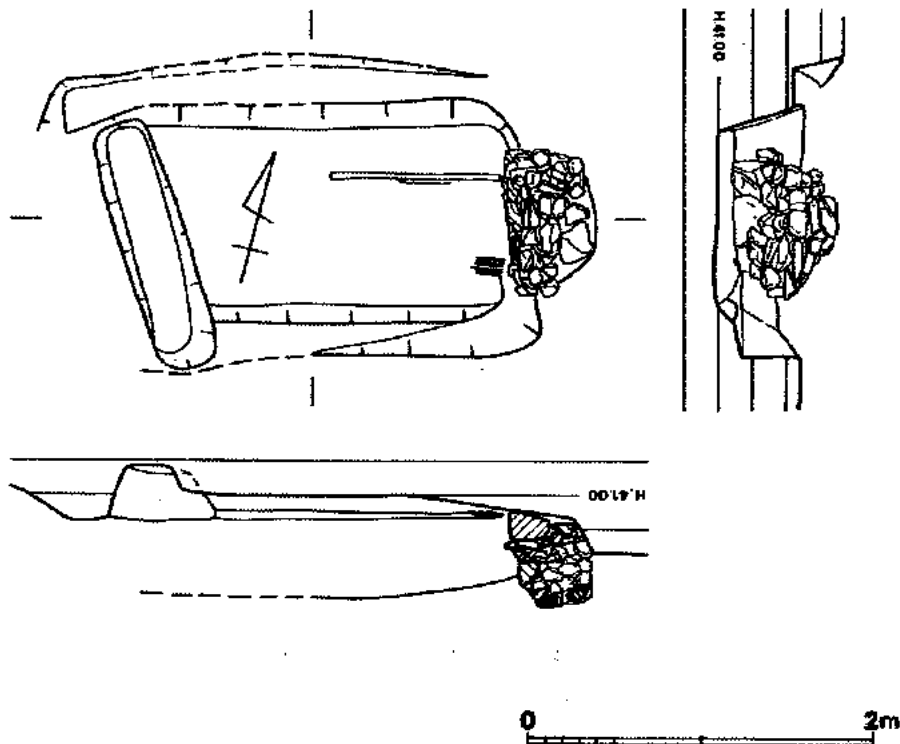
## 9. 第9号墳 (第34~37図, 図版11~13)

### 1. 立地と現況

7・8・9号墳と並んで立地する小派生丘陵の南端に位置し、三面に急傾斜面がせまっている。標高 42.85m を最高所とし、調査前においても、明瞭なる墳丘が認められた。



第34図 第9号墳土層断面図 (縮尺1/100)



第35図 第9号墳主体部実測図 (縮尺1/40)

## 2. 墳丘 (第34図)

礫混り粘質土を盛った一層が認められた。墳丘北側の尾根鞍部を切断して溝をめぐらしている。径約7mの円墳である。

## 3. 主体部 (第35図、図版12-2)

主体部は二段掘り込みの墓域中に築かれている。棺は片小口に小礫が乱積みされていた。反対小口には長方形のピットがあり、崖側に同様な小礫が散乱しているところから、両小口とも礫積みしていたと考えられる。しかし側壁の痕跡はまったくなく、木板か石板を立てたかと思われる。棺内法は1.65×0.6mである。床面は西に傾斜している。

## 4. 出土遺物

棺床から小口に接して鉄と大刀が出土した (図版13)。

### 鉄鏃 (第36図)

全て細根式鏃である。刃部は柳葉式のもの(1・3)と片刃斧頭式のもの(2)とがあり、いずれも鋭い腸快をもつ。筥被は断面長方形で太い。

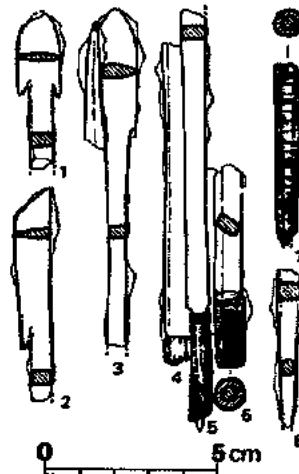
### 大刀 (第37図、図版24-1・25-9)

全長84cm、刃部長66cmの直刀である。把頭まで一本作りであり、環体の中に三葉をあらわした、いわゆる三葉鏃である。レントゲン写真で見ると環部及び三葉の表裏に銀象嵌を施している。

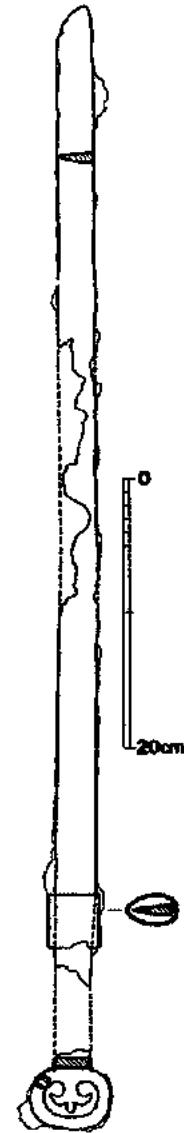
## 5. まとめ

墳丘規模は径7mと小さいが、特異な主体部をもっている。主体部は箱式の石棺か木棺に近いものと思われ、小口の礫積みは裏込めとして積まれたものかも知れない。

床面出土の直刀は銀象嵌された環部をもつ優品である。鏃は古式の長頸鏃であり、直刀と共に5世紀中葉をさほど隔たらない時期のものと考えられる。



第36図 第9号墳出土鉄鏃実測図 (縮尺1/2)



第37図 第9号墳出土鉄刀実測図 (縮尺1/5)

## 10. 第10号墳 (第38~42図, 図版14)

### 1. 立地と現況

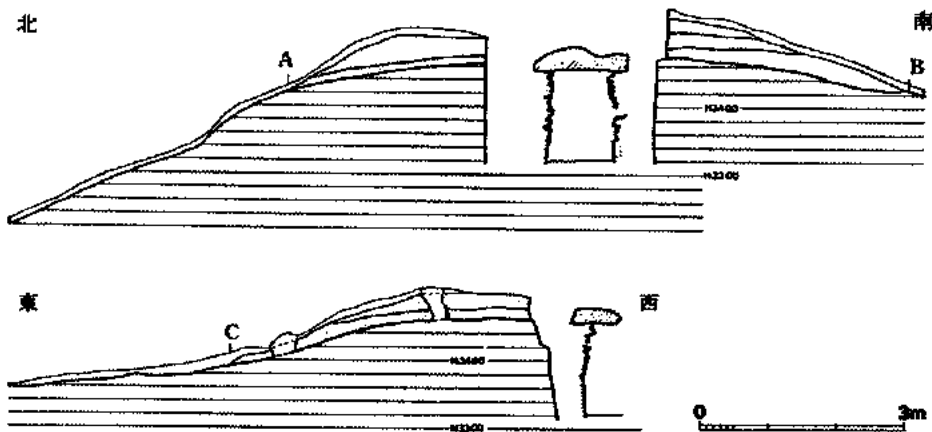
本墳は、第6号墳と第12号墳との間の鞍部のほぼ中央に位置しており、東接する第11号墳よりも1~2m高所にある。墳頂部の東北側に小さな陥没があり、南西側裾部が若干削られてはいるが、全体として墳丘・石室の遺存度は良好と思われた。

なお、南東側が張り出して一見小型の前方後円墳のような外観をとるが、これは、第11号墳の周溝が尾根を断ち切った結果に過ぎない。

### 2. 墳丘 (第38図)

遺存度は良好である。旧表土は除去されず、直接盛土されているが、斜面にあたる南北両側の裾部は若干削り出されているかに見える。盛土は40~60cm程度が現存する。

北・南・東の裾部は、各々A・B・Cとみられ、A・B間は9.75mである。当初の墳丘径は10mと復元され、その中心はほぼ玄室奥壁中央にあたる。



第38図 第10号墳土層断面図 (縮尺1/100)

### 3. 主体部 (第39・40図)

西に開口する全長 3.3mの塹穴系横口式石室である。北東側隅角部が破壊されているものの他の部分はほぼ完存する。本石室の特色は、後述する横口部の構造と同部の一石に描かれた文様?とにある。

地山を穿った墓域は、3.1 × 2.5mの長方形プランを呈するとみられるが、1.4 mと深く、かつ、城底が水平ではなく東=奥壁側が若干低いことが特徴的である。

奥壁ならびに両側壁は、基部に腰石を立て、以上を6~7段にわたって小口積みしている。北

側壁では、各段がほぼ水平位となるように積まれているが、南側壁の各段は、横口部寄りが若干高く積み方も稍劣る。奥壁はほぼ直立するが、側壁は若干内傾する。ただし、均斉ではなく南壁の度合が稍強い。石材は玄武岩質材が多用されているが、奥壁の腰石を含めて礫岩（・印）も併用されている。

床面には礫が敷かれたが、攪乱を受けたために南西側隅角部に僅かに残るのみである。

本石室の特色は、横口部にある。西側短側壁の基部は、3段に石材が積まれてその高さは56cmにも達し、最上段の石材は続く羨道部床面よりも若干高く、室の内外を画している。この上には、さらに両側から各4段の石を突出させて、袖としての構成をとる。袖石の最上段は側壁のそれと同高であり、これに直接最先端の天井石がかけ渡されている。つまり楣石がかけ渡されない点で他の壜穴系横口式石室と変らないが、室の内外に明瞭な段差がつくことが極めて特徴的である。

天井石は4枚で、間隙には小石材をさしこみ粘土で目張りしている。

横口部に続いて、天井石がかけ渡されない短簡な羨道部が設けられている。側壁は、玄室よりも若干巾が広く、ほぼ平行する。室内と比較して、石材も小振りで、積み方も粗く、特に南壁のそれが著しい。

墓道は、西側墓壁を掘り割ったもので、先端は尾根筋の鞍部ではなく稍南に偏して斜面に向っている。床面は、ほぼ水平である。

閉塞石は、ほぼ完存していた。下半は、2枚の板石を袖石にもたせかけ、土砂で裏ごめしている。上部は羨道側壁材と同大の石材で

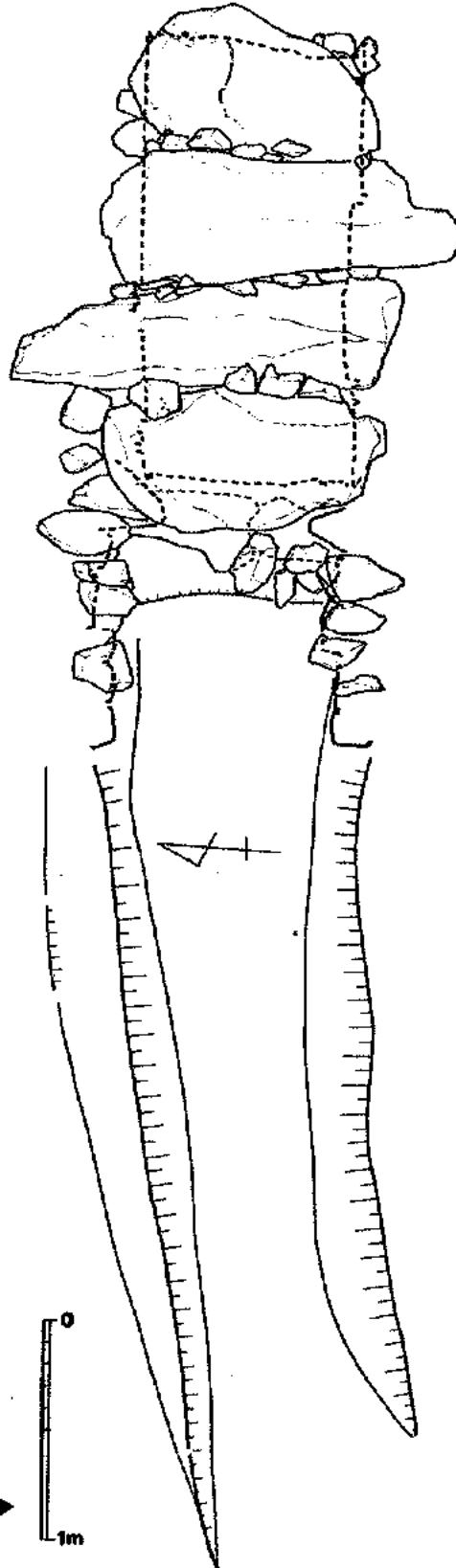
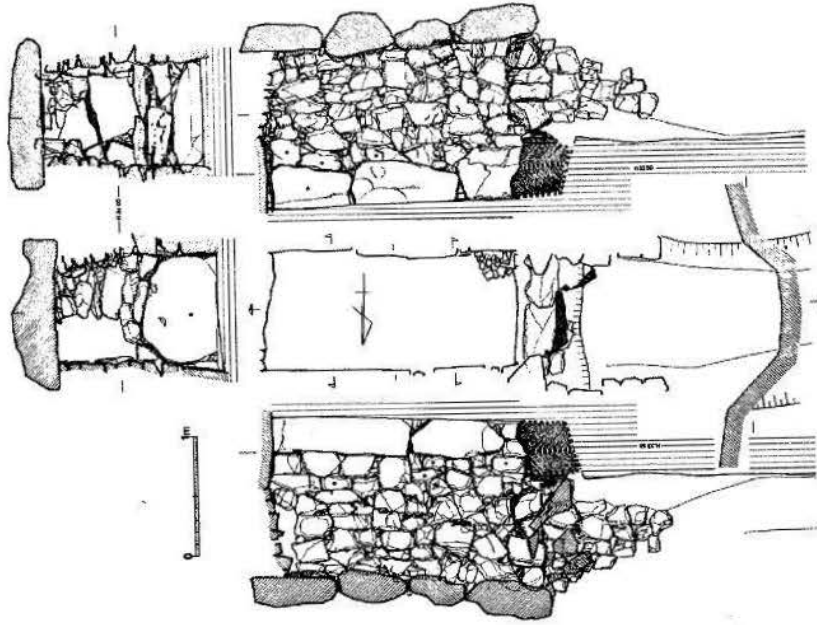


圖39 第10号墳石室平面実測図（縮尺1/30）▶



第44圖 第10号城石室実測図 (縮尺1/30)

塞ぐが、粗雑との感を免れない。あるいは、上部のみ閉塞石を外して追跡した結果とも考えられるが、断定し難い。

石室・墓道各部の計測値は、以下のとおりである。

玄室		横口部	
中央長	2.06m	巾	0.51~0.55m
巾	0.96~0.99m	高	0.85m
高	1.35m		
羨道		墓道	
長	0.88~1m	長	3.8m
巾	0.96~1m	巾	1~1.5m

玄室の両壁には、ほぼ全面にわたって赤色顔料が塗布されており、床の一部も赤く染っていた。ただし、袖石の羨道側の外面には塗られていない。天井石の一部にも顔料の痕跡が認められたが、全面に塗られたか否かは判然としない。なお、後述する最下段の閉塞石の内面にも塗布されている。

なお、これらの赤色顔料は、石によっては線あるいは円文状に残存しているために、一時は描かれた文様ではないかとの疑問が生じた。しかし、以下の理由により、これらの殆どは顔料の遺存度が異なるためのもので、文様ではないと判断するにいたった。

- ① 小口以外の面にも顔料が塗られている。
- ② 小口に残存する場合でも、その中央部ではなく隣近くの端部に残存する場合が多い。

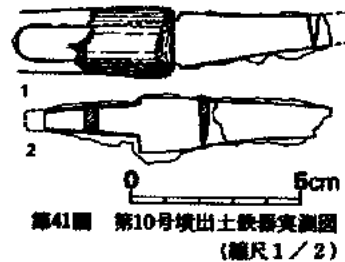
けれども、単に顔料の遺存度が異なった結果によるとは考えにくい、文様?とも思えるものが少くとも1ヶ所にある。西側短側壁第2段目の南側石材の面に残る顔料がそれである。長さ52cm強、最大巾20cmの平滑な面の向って左上に、巾13~32mm前後の上部に突起をもつ1条の屈曲する線とも思える部分がある。これ以外は、部分的に顔料の痕跡が幽かに認められる程度である。

#### 4. 出土遺物

石室内は徹底した撓乱を受けており、刀子2口分の破片を採取したにとどまる。2は、南壁沿から鋒を西に向けた状態で出土したが、原位置を移動している。この他墓道堆積土中から須恵器甕片1が出土した。

##### 刀子(第41回)

1は、現存長9.2cmで鋒を欠き、研減りが著しい。開部巾は16mm強、茎長45mm。柄の木質が残る。2は、現存全長8.4cmで、鋒と茎とを欠く。1と同様に研減りが著しく、開部巾は16mm、



第41回 第10号墳出土鉄器実測図  
(縮尺1/2)

## 須恵器 (第42図)

甕の口頸部の一部のみが採取されている。復元口径22cm、同頸部径15.4cmで、部分的に暗灰青色を呈して焼成は堅緻。細粒を若干含むものの、胎土は良好。頸部は加飾されず、ナデ痕が著しい。



第42図 第10号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

## 5. まとめ

## 石室構造と年代について

狭小な直方体の玄室空間と、欄石をもたない横口部——前壁ならびに短簡な羨道部は、いずれも堅穴系横口式石室としての特徴を示す。室内外の段差が著しい横口部の構造は、横穴式石室導入期にありがちな試行の結果であろう。墓址を深くすることによって、墳丘盛土作業における土砂運搬の省力化は果されるが、反面、石室への墓道——切り通しの法面の維持に難点を生じる。天井石をかけ渡した羨道部の構築によってこの問題は技術的には解決されるのであるが、本石室のように未発達な前壁と短簡な羨道部しか構築し得ない段階にあっては、墓道を斜め上方に設定するか墓道を浅くすることによってこの矛盾の解消を図る例が多い。

本石室は、横穴式石室としては古式に属するが、浅いながらも長い墓道を設けている点で、堅穴系横口式石室としては若干後出的様相を示すと思われる。従って、築造期の下限をほぼ6世紀初頭に求めて良いと思われる。

## 文様について

文様か否かさえ不明である。赤色顔料の塗布が、巾の広い刷毛ではなくより細い筆状器具で行われたとすれば、その過程で戯れに一種の図文が描かれた可能性はある。さらに、最終的には塗り潰されたにしても、塗りムラが生じ、これが顔料の遺存度が部分によって異なる要因の一つとなったとも考えられる。

ただし、これを加飾を目的として描かれた文様とすると少なからぬ疑問がある。まず、文様としての全形が不明であり、類例がない点が挙げられる。次に、奥壁には描かれず、外からは見えない横口部基部に描かれたことになり、装飾古墳の一般的な描画位置とは異なる。さらには、当該地域は6世紀後半代に比定される宗像郡玄海町・桜京前方後円墳の1例があるものの、装飾古墳の分布の中核から外れているだけに、6世紀中葉とされる嘉徳郡桂川町・王塚前方後円墳に先行する古式の装飾古墳が営まれたとは考えにくい面がある。

従って、現時点では文様であるか否かについての連断をさげ、向後の類例の増加をまつこととしたい。

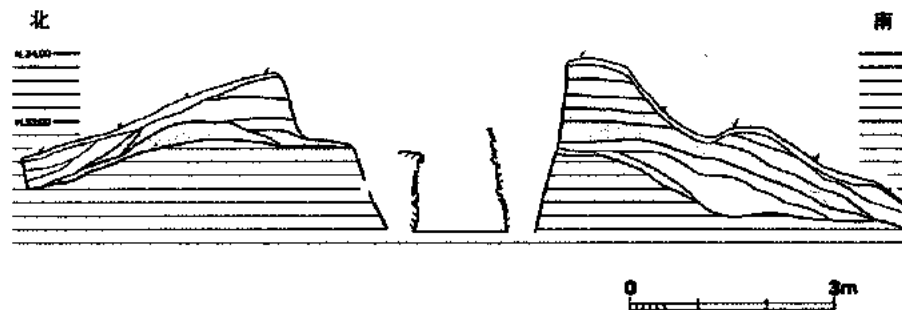
## 11. 第11号墳 (第43~46図, 図版3・16・17)

### 1. 立地と現況

10号墳の西に接した尾根鞍部にあり、尾根は南北に急角度で落ち込んでいる。標高 33.90m を最高所としている。南側の墳丘裾部がやや乱れていたが、墳頂部には盗掘坑らしきものは現表面ではみられなかった。

### 2. 墳丘 (第43図)

比較的良く残っており、径12.0mの円墳である。墳丘の築成は地山整形した後、外周より盛土を始めている。北側及び東側で浅い周溝が認められた。



第43図 第11号墳土層断面図 (縮尺1/100)

### 3. 主体部 (第46図)

N-104°-Wの略西に開口する竪穴系横口式石室である。奥壁側天井石と側壁上部が破壊されていた以外遺存度は良好である。

墓壇の深さは1.3mあり、長方形プランを呈すると思われる。

玄室プランは中央長約2.9m、左側長2.95m、右側長2.70m、奥巾1.32m、前巾1.15mである。左側壁が前へ張り出している。奥壁腰石は床面からの高さ70cmの一石よりなる。なお、この石は表面の剝落部分が多く、後述する彩色が剝げ落ちている。腰石の上には8段小口積みされ、壁面は垂直に立っている。床面からの高さは1.72mで、天井石はないが、本来の高さを止めていると思われる。

側壁の腰石は奥壁側より順次小さくなる6石を左右共用している。壁面は直線的に内傾するが、積み方の面揃えが粗く、凹凸が甚しい。床面は奥壁側が下っている。

横口部は巾68cm、高さ1.36mである。床面からの高さが左右各々79cm、61cmの柱状石を立て上に5石横積みして楣石を架構している。楣石は二段よりなり、上段の石が羨道部側に凸出し

ている。

後道は左側長40cm、右側長56cmで、巾は1.1mであり、玄室前巾に等しい。石積みは玄室のそれに比して雑である。

墓道の中央長は1.15mで、床面は前にせり上がっている。

天井石は枕状の4石残しており、同丈の石を用いればさらに4石必要であり、本来は8石積後あったと思われる。

閉塞石は横口部床面上から三段横積みされ、その上に板状石を立てている。本来横積み石上面まで外部を埋土していたものと思われる。

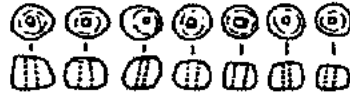
玄室の各壁面はほぼ全面的に赤色顔料が塗布されている。但し奥壁の第2段石下縁は特に濃い顔料がみられ、意識的に直線状に引いたものかと思われる。また右側壁の最奥第2段目の石面中央には突起のある小円紋状の個所が3個認められた(図版3)。

4. 出土遺物

石室からガラス玉が出土した。墓道の埋土中より須恵器片が出土した。いずれも小片で、全器形を知りうるものはない。器種は壺・壺・器台である。

ガラス玉 (第44図)

濃紺の小玉であり7個出土した。径は9.0~7.0mmである。

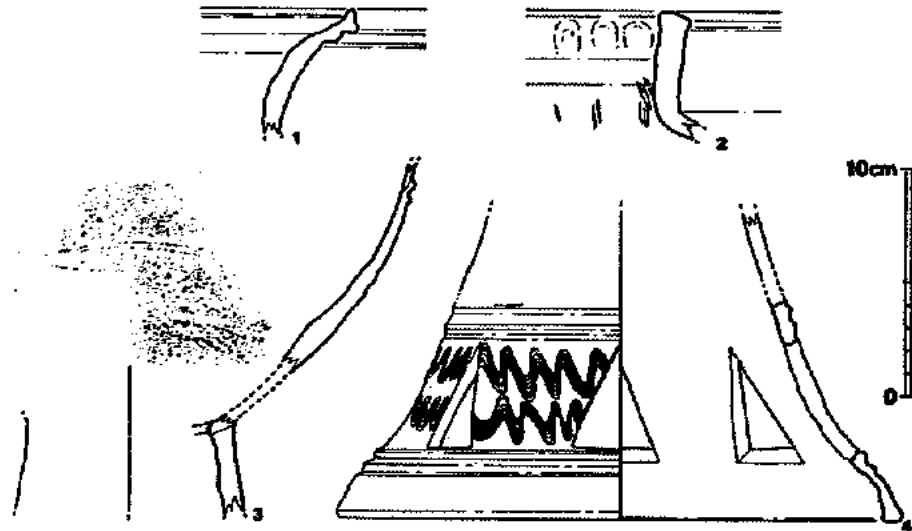


須恵器 (第45図)

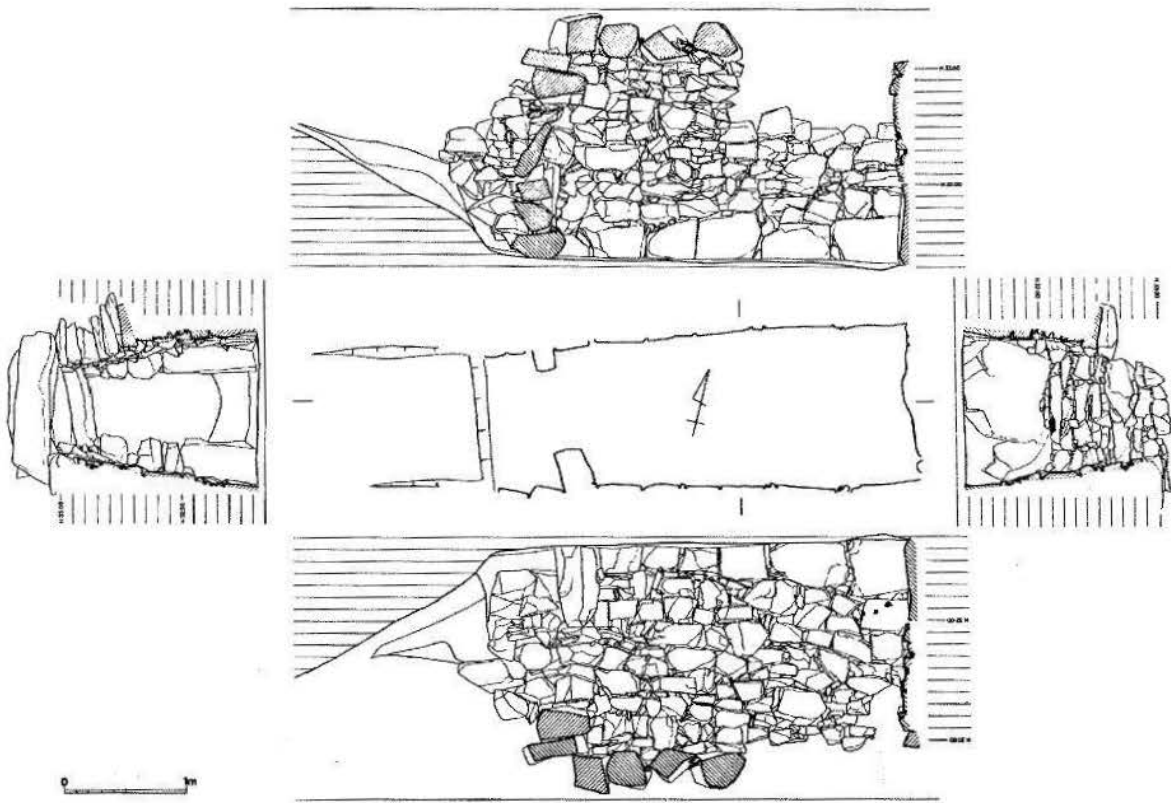
壺(1) 口唇部はやや内窪みする平坦面をもつ。端部は丸味を帯びている。口唇部下に1条の巾広の凸帯をめぐらしている。内外面ヨコナデ調整である。



第44圖 第11号墳出土装身具実測図 (縮尺2/3)



第45圖 第11号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)



第46图 第11号烽火台侧视 (缩尺1/30)

蓋(2) 直口蓋である。器壁は厚く均一である。端部は丸い。外面はヨコナデ調整、内面は端部下指押えし、頸部との接合部付近にはへら状工具による削痕が認められる。硬質である。

器台(3・4) 同一個体の脚部と鉢身部と思われる。鉢部は二重凸帯下に波状紋を配している。内面に自然軸が付着している。脚部は下段に三角透しを、上に方形透しを配している。底径24.8cm。

## 5. まとめ

狭い尾根鞍部に立地する径12.0mの円墳である。主体部の竪穴系横口式石室は掘石をもち、10号よりは新式の作りである。

玄室内面には一面赤色顔料が塗布されていたが、2箇所あるいは意図的な文様とも思える部分があり、10号墳と同様な傾向をもっている。

## 12. 第12号墳 (第47~49図, 図版18)

### 1. 立地と現況

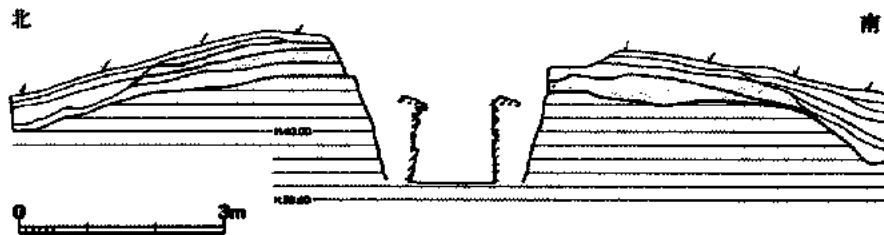
遺跡最東端、最高所に位置する。広い鞍部上に単独に占地している。最高所の標高は41.48mである。墳頂に盗掘による陥没坑があり、周囲は平坦である。見かけは径約15mあり、南西側に墳土の流出によると思われる張り出しがみられた。

### 2. 墳丘 (第47図)

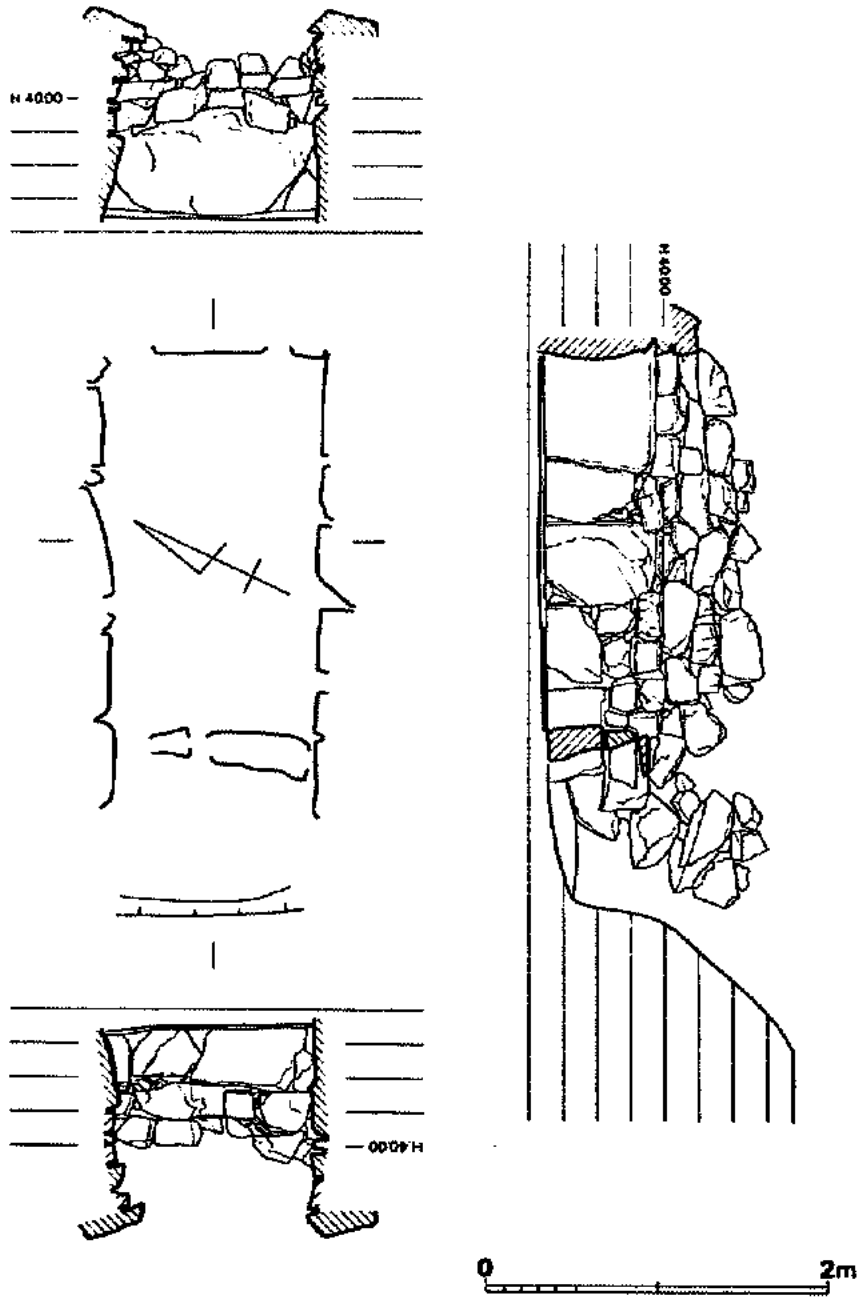
墳丘部下の地山整形は行っていない。墳丘は墓域及び周溝の掘削土による単純層が僅かに残っていた。周溝内側の径は13.3mである。

### 3. 主体部 (第48図, 図版18)

深さ1.5mの長方形墓域中にS-15°-Wの略西に開口する竪穴系横口式石室が築かれている。玄室の内法は中央長2.25m、中央巾1.24mで巾広の長方形プランである。奥壁の腰石は一枚石で、上に水平を保つように小口積みしている。側壁の腰石は左右各5枚の表面平滑な石を用いている。前面に近い2石が小振りである。積み上げに際して水平を保つよう意図したことは明瞭で、特に前側2石上の2段石列の上面レベルは奥壁側腰石上面レベルに等しくされている。



第47図 第12号墳土層断面図 (縮尺1/100)



第48圖 第12号墳石室実測図(縮尺1/40)

北壁はやや倒れ込んでいるが、各壁共垂直に立ち、全体に直方体に近い構造となっている。高さ1.3m分が遺存している。

横口部の中は玄室と等しい。3段積まれており、本来の高さを残していると思われる。

羨道は中央長80cmあり、側壁の石積みは玄室に比べて雑である。前壁は直立して、急角度の前庭へと続いている。

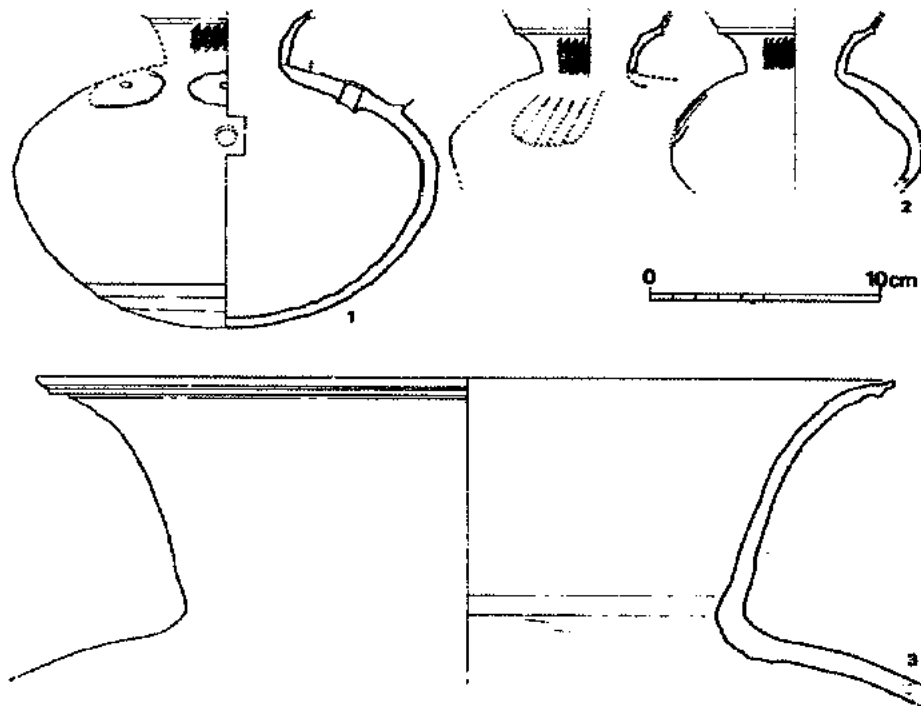
#### 4. 出土遺物

南西側の墳丘中からまとまった量の甕を中心とした須恵器片が出土した。但し器形を知り得るものは僅かであり、意図的に破砕したものと思われる。

須恵甕 (第49図, 図版23)

甕 (1・2) 1は子持甕である。残存部が少ないため不確かではあるが、7個の子が付くものと推定される。接合用に径7mmの孔を肩部に穿っている。胴部はやや肩の張った扁球で、最大胴部のやや上に1孔穿っている。胴部に比して頸部の器壁は薄い。最大胴径18.5cm。硬質で、胎土も精製されている。

2は胴部楕円形で胴部上半の両側に粘土板を貼り付け、その外周をヘラで切り落して形を整



第49図 第12号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

え、中に4条の平行斜線を引いている。羽根を表わしていよう。つまり当例は鳥形彫と思われる。頸部から口縁部にかけての器壁は薄く、段部稜も鋭い。1と同様に硬質で、胎土も精製されている。

壺(3) 口径の割に薄手の頸部と口縁部を持つ。水平に広がった口縁部の端部はやや跳ね上り直下に凸帯をしつらえている。胴部内面は同心円叩きである。口縁部の内外面と胴部外面には自然釉が流れている。口径37.3cm。硬質である。

## 5. まとめ

遺跡東端の最高所に独立して古地しており、その事からも当古墳の優位性と時代性が伺われる。石室は直方体に近い構造を持ち、石積みは丁寧で、水平を保ちつつ積み上げている。

出土した須恵器のうちに特異な器2点を含んでおり、それらが意図的に破砕されて墳丘下に埋められた点、墳墓に対する当時の意識を考える上で重要である。

石室構造及び出土須恵器によって、当古墳は5世紀後半のものと考えられる。

## 13. 第13号墳 (第50~55図, 図版19・20・24)

### 1. 立地と現況

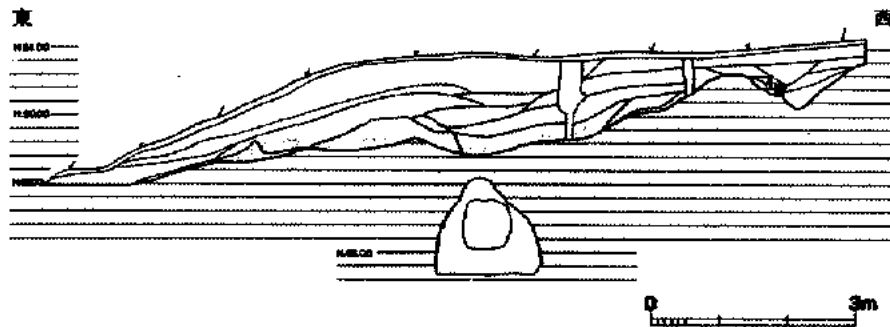
丘陵中央部から南に派出する支脈付近の南西側傾斜面に位置する。接する東西の斜面中においてこの部分のみ平坦面を有しており、トレンチ発掘の結果、古墳であると判明した。

### 2. 墳丘 (第50図)

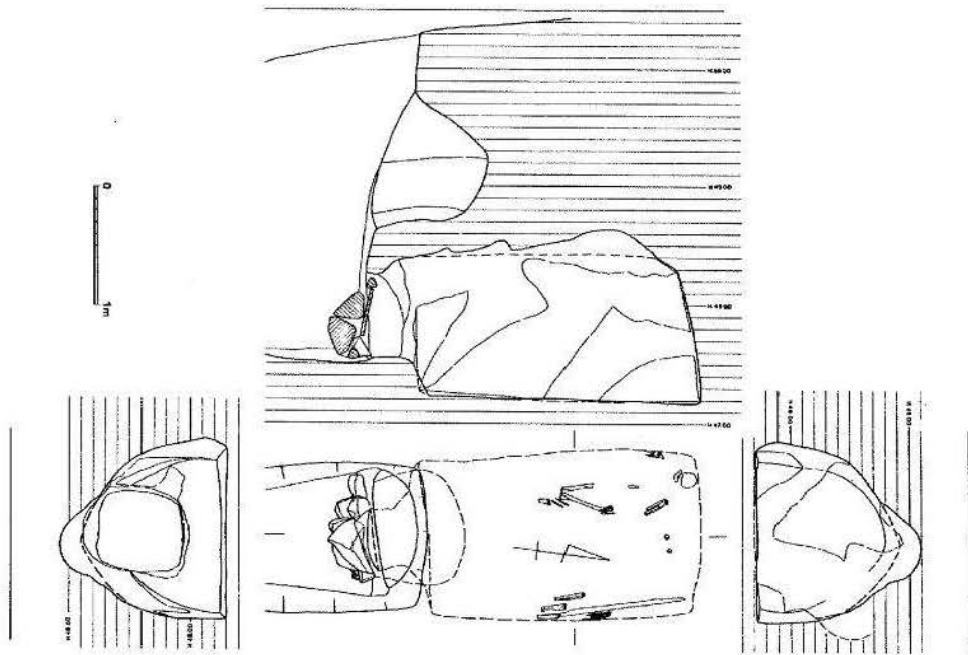
山側の北側から東側にかけて馬蹄形の溝がめぐり、その内側に盛土されている。墳丘築成は外縁部から始められ、玄室上部は周縁が土手状になってから盛土している。

### 3. 主体部 (第51図)

S-7-Eのほとんど真南に開口する横穴である。玄室の内法は中央部で1.41×2.30mの長方形プランを呈している。床面は奥側に傾斜している。壁面は天井部を含め崩壊した箇所もあ



第50図 第13号墳土層断面図 (縮尺1/100)



第51圖 第13号墳主体部立面図(縮尺1/30)

るが、比較的良好な遺存状態で、下半の壁面では削り痕も明瞭に残っていた。

残存する壁線を延長して天井部を復元すると頂部が尖るドーム形をなし、床面からの高さは最高1.22mとなる。また同個所における地山上面から天井までの深さは約2mである。

羨道部の床面は玄室より33cm高くなり、天井までの高さは70cmとなる。長さは42cm、前巾52cmであり、隅丸方形に開口する。

前面の閉塞石は横積みした柱状の石の上に板石を立て、その外側にさらに角礫を積み上げている。

羨道部天井の40cm上には奥行90cm、口巾92cmの不整形の竈があり、その底面には灰が堆積し、壁が焼けていた。ここで火を焚いたことは疑いなく、特殊な例だけに注目される。

墓道は全長5.3mあり、奥巾は1.0mあって前庭状に広がり、その後53cmまで巾を狭めて、さらにまた広がっている。

#### 4. 出土遺物 (図版19-20)

玄室の床面から装身具と武器が3体の人骨に伴って埋葬時の状態を留めて出土した。まず左奥隅には頭蓋があり、四肢骨の一部も残っていた。右肩部付近に鉄鎌が骸身を奥へ向けて副葬されていた。床面中央部には耳環2個が13cmの間隔で並んでおり、その付近から羨道側に約1mの長さで、黒色の腐蝕土質がみられた。右壁側では下肢骨の一部が遺存しており、左脇に接して大刀と鉄鎌多数が副葬されていた。また床面からは土玉6個も出土している。

周溝中からは完形の甕1個が出土した。

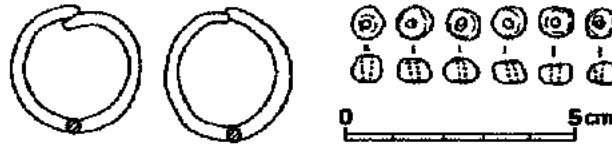
##### 装身具 (第52図)

耳環 (1・2) 細身の銅製耳環で環径は2.7～2.8cmである。形態は8号墳出土の銀環に近似している。

土玉 (3～8) 径6.0～7.0mmの小玉である。

##### 武器

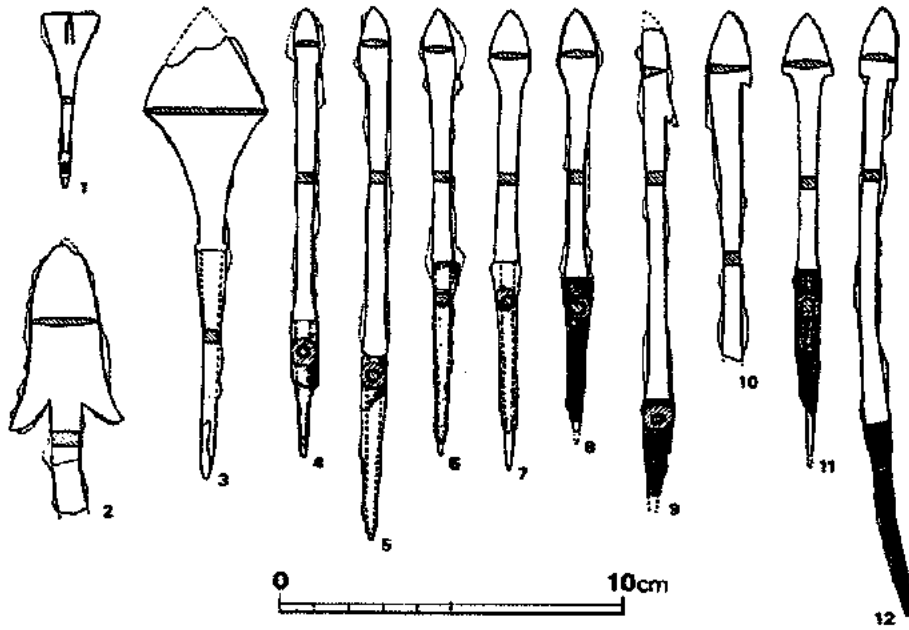
鉄鎌 (第54図) 1～3は平根、他は細根式の長頸鎌である。1は特殊な小形品であるが、形態は円頭斧箭式で、莖被と茎の境はない。全長5.2cm。2



第52図 第13号墳出土装身具実測図 (縮尺2/3)

第53図 第13号墳出土鉄刀実測図 (縮尺1/5) ▶

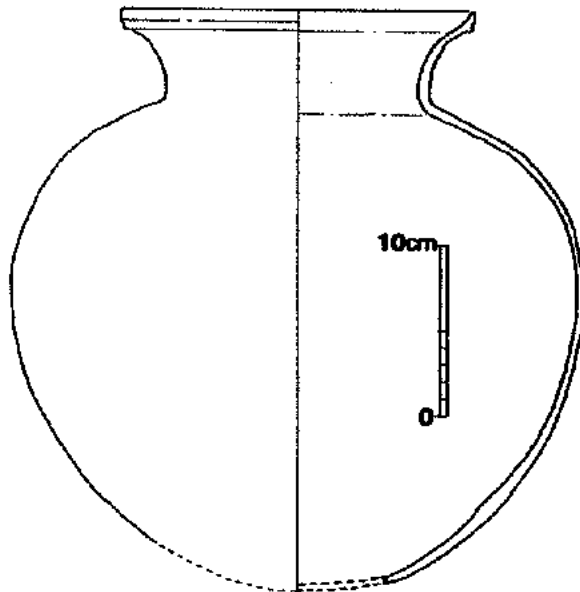




第54図 第13号墳出土鉄鏃実測図（縮尺1/2）

は柳葉形で、長い脇袂をもつ。鏃被は断面長方形で太い。3は堆定復元全長14.1cmあり、棘鏃被である。細根式には3種あり、4～8は関無で、片丸造のもの(4)と両丸造のもの(5～8)とがある。鏃被下端はいずれも広がっている。全長は最短8の13cmから最長の5の16cmまでまちまちである。9・10は片刃斧箭式である。9の刃部は細身で鋭い脇袂をもつものに対し10は巾広く脇袂も浅い。11・12は三角形式で、11は片丸造、12は両丸造である。12は全長18.2cmあり出土品中最長である。

鉄刀（第53図） 全長 110.3cm、



第55図 第13号墳出土須恵器実測図（縮尺1/4）

刃部長96cmある大形の直刀である。刃部巾は3.5cm、鋒部厚7.5mmで、中央部がややふくらむ。茎は端部に段が付いて切り落ち、目釘穴2孔がみられる。刀身と茎に木質が付着している。

須恵器(第56図)

壺1点である。薄手で均整のとれた作りである。口縁部は端部が鋭く直立し、外面端部下に三角凸帯をめぐらしている。軟質で茶褐色を呈している。器高34.2cm、口径20.6cm、胴部径33.5cm。

#### 5. まとめ

墳丘築成は外縁から始められ、土手状の外帯を作ってから内側を盛土している。墳丘外縁の山側に馬蹄形溝がめぐっている。主体部の横穴は比較的良く遺存しており、横断面は先端の尖るドームをなしていたと思われる。注目されるのは前面の竈である。この中で火を焚いていた事は間違いない。

玄室内からは3体の人骨とその副葬品が埋葬時の状態のまま検出され、貴重な資料を提供した。

玄室及び周溝から出土した遺物から当古墳は6世紀初頭のものと考えられる。

### 14. 第1号竪穴式小石室(第56・57図、図版20・21)

#### 1. 立地と現況

東西の丘陵高所を結ぶ狭い通路鞍部から2基の小石室と石蓋土壇1基が検出されたが、1号小石室はその中央に位置する。墳丘を持たない。

#### 2. 主体部(第56図)

2.03×1.35mの隅丸方形墓壇中に築かれている。内法は88×30cmである。腰石を立て、上に小口積して、天井石3石を架している。積み方は粗雑で、控えの取り方も短い。

#### 3. 出土遺物(第57図)

床面から5cm浮いたレベルで鉄器が副葬されていた。

鉄刀(1) 全長24.9cm、刃部長17.8cmあり、やや内反りしている。片闇である。茎には木質が付着している。

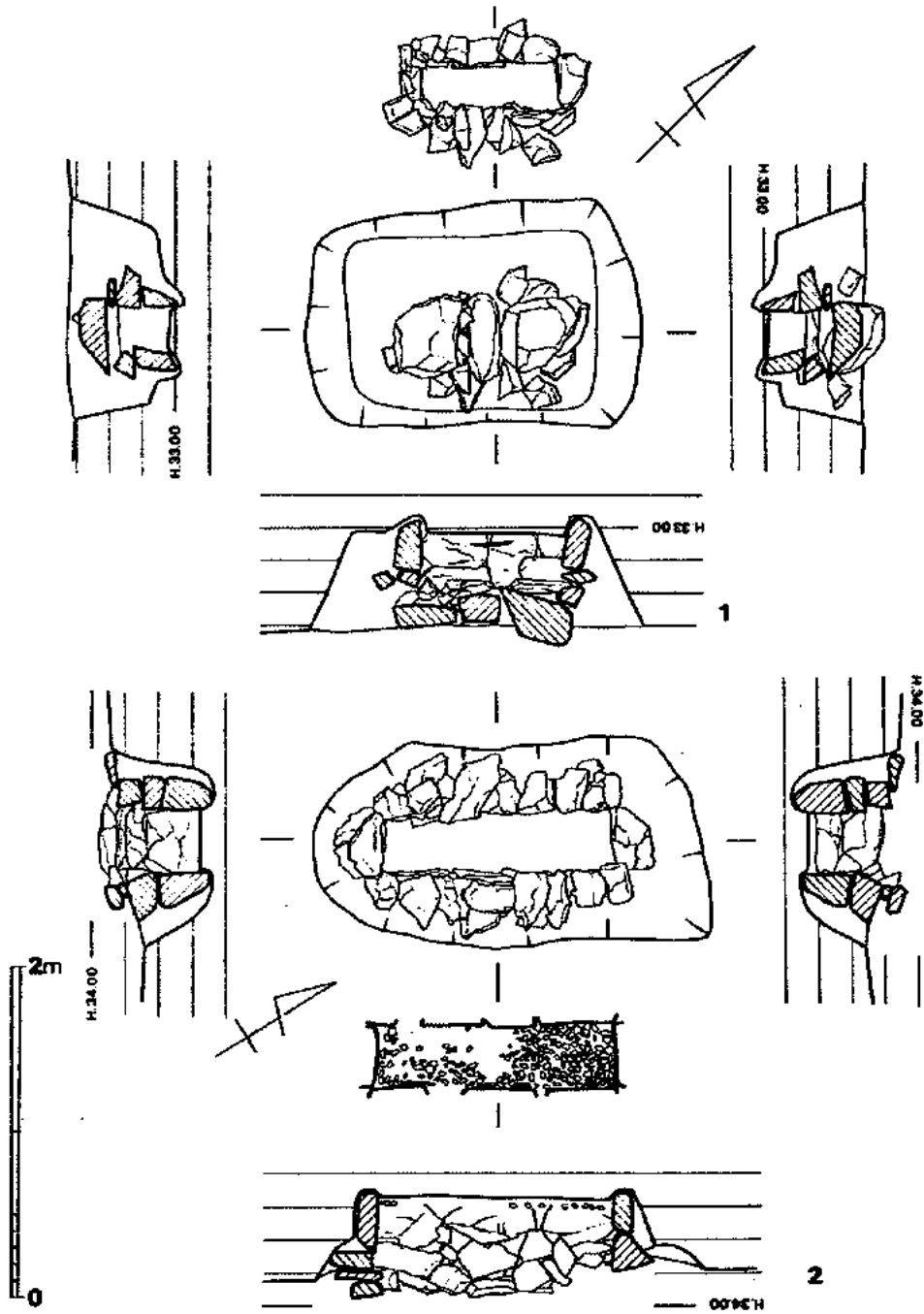
鉄鎌(2~4) 2は片刃斧箭鏃快式である。穂被と茎の区分は不明瞭である。

### 15. 第2号竪穴式小石室(第56図、図版20・21)

#### 1. 立地と現況

1号小石室の東側に約5m離れて検出された。

#### 2. 主体部(第56図)



第56圖 竪穴式小石室突測圖 (縮尺 1/40)

約  $2.3 \times 1.25m$  の不整形基壇中に築かれた石室で、内法は  $1.4 \times 0.36m$  の長方形である。天井石は抜き取られていた。石積上げ法は1号と同様で、やはり粗雑である。床面には小礫が敷かれている。

## 16. 箱式石棺墓 (第59図, 図版22)

### 1. 立地と現況

4号墳墳丘下で検出された。

### 2. 主体部 (第59図)

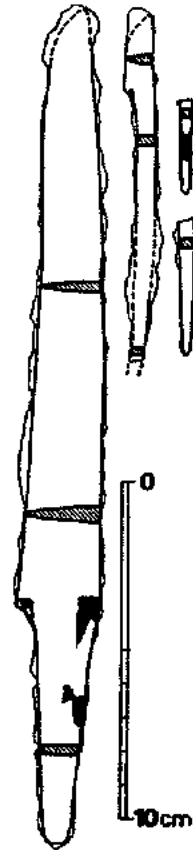
$2.65 \times 1.25m$  の楕円形基壇中に築かれた石棺で、内法は  $2.0 \times 0.45m$  の長方形である。両小口を挟み込んだ側壁は5・6枚の板石よりなり、縦に長く用いた側が足位である。小口に用いた板石も頭位側が厚く大きい。天井石は足位の1石が抜かれており、5枚遺存していた。床面から天井石までの深さは40cm前後である。床面は頭位側が高い。

### 3. 出土遺物 (第58図, 図版 )

下肢骨が残っており頭側から鉄鏃と刀子が出土した。

鉄鏃(1) 定角広楯式である。

刀子(2) 全長 8.7cm、刃部長 6.8cmの完形品である。鋒部は直線的だが刃部は開部から1.5cmの部分から細身になる。茎は片開で、開部から1.4cmまでに木質が、それより先には鹿角が付着している。



第57図 第1号壙穴式  
小石室出土鉄器実測図  
(縮尺1/2)

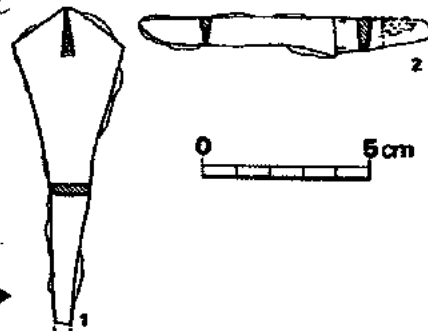
## 17. 石蓋土坑

### 1. 立地

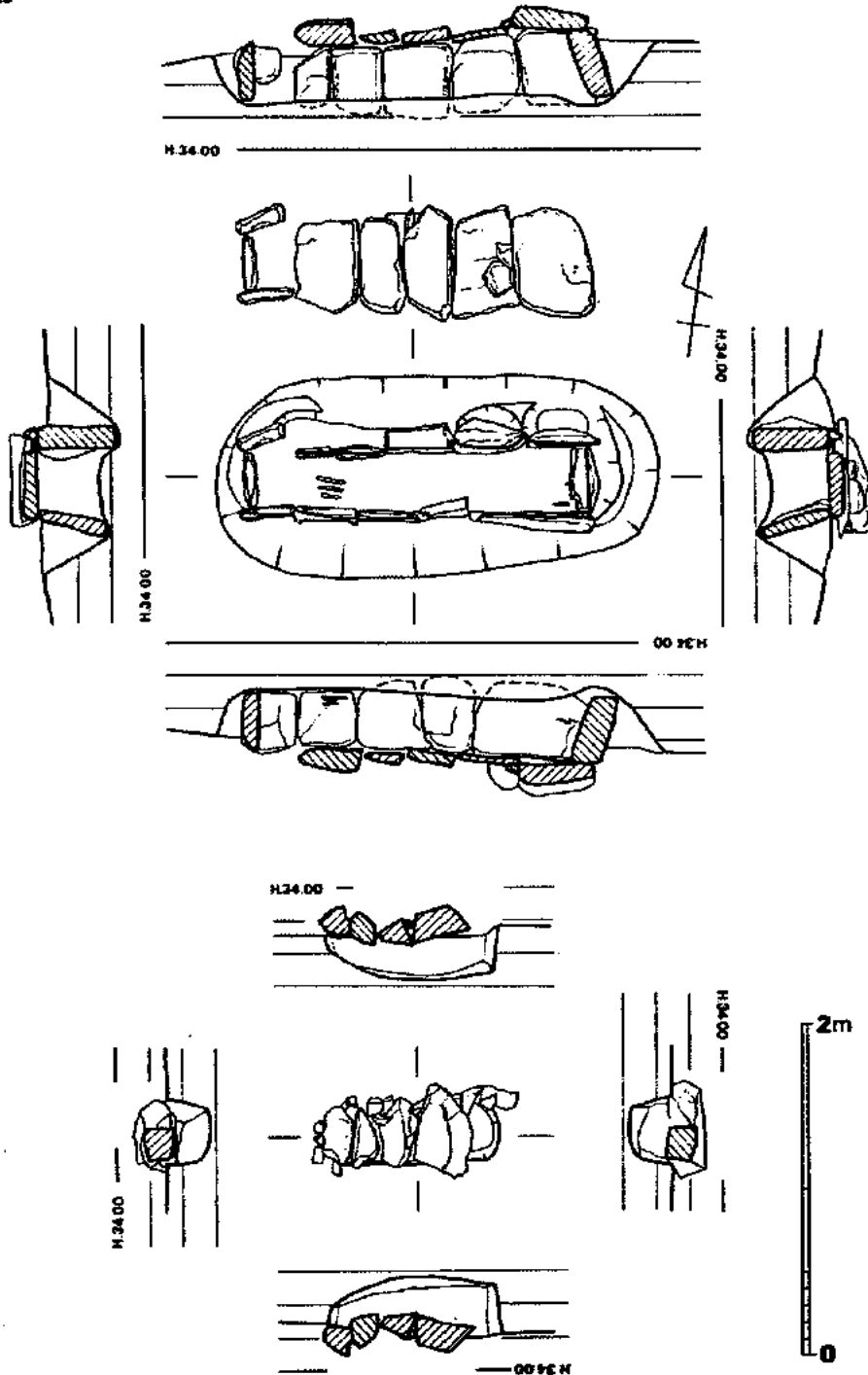
2号小石室の東側に約2.5m離れて検出された。

### 2. 主体部 (第59図)

$1.05 \times 0.4m$  の隅丸長方形の素掘り土坑の上に4個の枕状天井石を架し、間を小礫で充填している。床面は凹面をなし中央部の天井までの深さは20cmである。



第58図 箱式石棺出土鉄器実測図 (縮尺1/2) ▶



第59圖 箱式石棺墓・石蓋土坑墓夷測圖 (縮尺1/40)

## IV ま と め

調査によって検出した古墳は13基で、他に堅穴式小石室2基、石棺1基、石蓋土壇1基がある。各古墳の内部主体はバラエティーがあり、堅穴系横口式石室5、横穴3、箱式石棺2、割竹木棺1、特殊棺1、木蓋土壇1である。

古墳群中で最も早く出現したのは箱式石棺を主体とする4・6号墳であったと思われる。古墳の径は各々16.5mと17.5mで古墳群中最も大きい。

いづれも盗掘を受け、棺内も擾乱され、棺材さえ抜き取られていたが、6号墳から出土した鉄器中に三角板革綴短甲と同曹が含まれていた。この短甲は5世紀初めに流行した類である。同時に出土した土師器埴も、最近の研究では4世紀末から5世紀初頭と考えられている。古墳の築造もその頃と考えられる。4号墳は出土遺物が皆無であるが、丘陵中の最高所で、鞍部も最も広い地を利用しており、6号墳と同時期か、やや遅る時期のものと考えられる。

なお石室土壇をもつ5号墳と割竹形木棺をもつ7号墳もこの時期に属する可能性がある。

次いで9号墳が丘陵の南に派出する支脈端に築かれた。主体部は二段掘り込みの墓壇中に造られている。棺は片小口に小礫が乱積みされていた。反対小口には長方形のピットがあり座側に同様な小礫が散乱しているところから、両小口とも礫積みしていたと考えられる。但し、この礫積みは小口の裏込めの可能性もある。しかし側壁の痕跡はまったくなく、木板か石板を立てたかと思われる。棺床から小口に接して鎌と大刀が出土した。鎌は全て長頸鎌で、中に脇袂の鋭いものや、柳葉式のものを含んでいる。大刀は三葉環であり、レントゲン写真でみると銀象嵌されている優品である。これら出土品から、当9号墳は5世紀中葉のものとする。

第3段階に堅穴系横口式石室を主体とする古墳が丘陵の東西両端に分かれて造られている。西側の1・2号墳は墳丘径各々8mと9mと小さいのに対し、東側の10～12号墳は墳丘径各々10.0、12.0、13.3mと大きく、東西両グループのもつ質的差を見せている。東側グループの3基は石室構造と出土遺物から12→10→11の築造順になり、12号墳は5世紀後半、10号墳は6世紀初頭、11号墳は6世紀前半と考えられる。10・11号墳の石室内部はほぼ全面にわたって赤色顔料が塗布されている。10号墳は西側の短側壁第2段目の石に上部に突起する一条の屈曲する線と思える部分がある。また11号墳奥壁第2段目の石下縁に一条の線が、南側壁最奥第2段目の石面に小円紋が見え、あるいは文様かと思われる。

堅穴系横口式石室をもつ古墳からは前代に見られなかった須恵器が検出された。特に12号墳墳丘に接した地山上からは子持甕と鳥首付甕が出土している。また軟質の陶質土器片が2号墳から、硬質の直口壺・口縁片が11号墳から出土しているが、これらは金海系の輸入土器と考えられる。

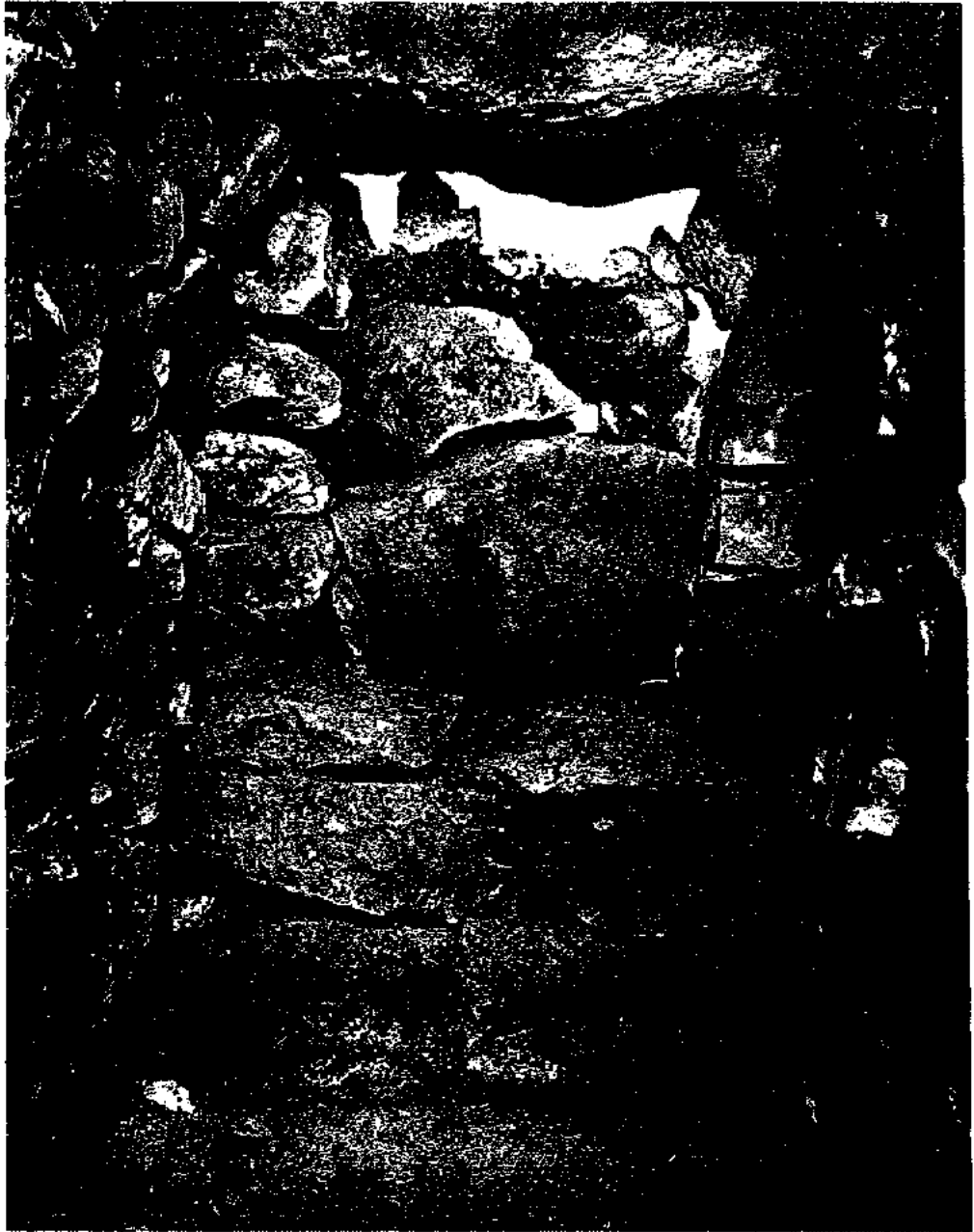
第4段階に3・8・13号の横穴を主体部とする古墳が出現する。丘陵中央部の支脈派出部コーナー南面のみ集中している。墳丘をもつ横穴の検出例は山口県山口市の朝田古墳群中に1例、行橋市竹並遺跡で2例あるが、今回3例を加えたことになる。玄室の残りの良い13号は横断面の天井が鋭るアーチ状をなし、8号を復元しても同様で竹並例と共通している。13号墳の入口上の面には倉があり、その底面には灰が堆積し、焼けていた。ここで火を焚いたことは疑いなく、特殊な例だけに注目される。3号と8号の墓道から出土した須恵器は僅かであるが、6世紀初頭～中葉のものである。但し、8号墳の周溝から出土した甕と高杯は5世紀に遡るものであり、混入なのか、古墳に伴うものか判断に苦しむところである。

以上丘陵上の各古墳の時期差と各時期ごとの主体部型態差と占地の差を概述した。丘陵上の最良地を利用した第1・2期が、第3期になると東西両端に分裂する2グループを作り、さらに第4期になると1個所に集中して当丘陵上での古墳は消滅する。今後、谷を挟んで北面する丘陵を発掘調査するが、6世紀末から7世紀の古墳群が予想され、今回調査分と合せて4世紀から7世紀にわたる久戸古墳群の全貌が明らかにされると思う。

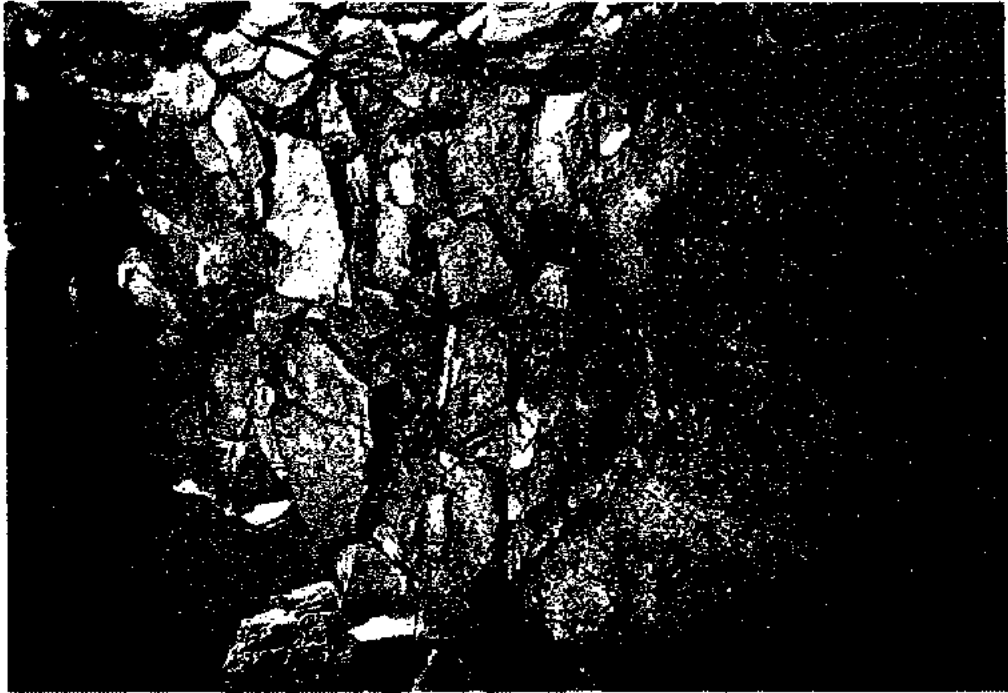
	墳 丘		主 体 部		土 器			鉄 器		装 身 具		時 代	備 考
	径	周 長	主軸(開口)方位	型 態	須恵器	土師器	陶質土器	工 具	武 器	耳 環	玉		
1	8.0 <sup>m</sup>	北東	N 37° W	壘穴系横口式石室	甕				鉄			5世紀末	
2	9.0	北東	S 53° W	壘穴系横口式石室	甕		甕		鉄・大刀			5世紀末	
3	6.3	北～北東	S 45° E	横 穴	甕・埴				大刀			6世紀中葉	
4	16.5	北西～南東	N 58° W	箱式石棺								4世紀末	
5	8.0	西	N 86° E	木蓋土塚				刀子				6世紀中葉	
6	17.5	西	N 55° W	箱式石棺		埴 手ずくね			大刀・小刀 三角板革履短甲・青			4世紀末	
7	9.0	南	N 82° E	割竹木棺	甕・埴							6世紀前半	
8	6.7	北東	S 43° W	横 穴	高杯・甕					あり		6世紀中葉	
9	7.5	北	N 76° E	木 棺					鉄・大刀			5世紀中葉	
10	10.0		N 92° W	壘穴系横口式石室	甕			刀子				6世紀初葉	彩色石室
11	12.0	北	N 76° E	壘穴系横口式石室	甕・磐台		直口壺				ガラス玉	6世紀前半	彩色石室
12	13.3	全周	S 15° W	壘穴系横口式石室	甕・甕							5世紀後半	
13	9.0	北～東	S 7° E	横 穴	甕				鉄・大刀	あり	土玉	6世紀中葉	
小石室1			N 46° E						鉄・小刀				
小石室2			N 32° E										
石 棺			N 82° E						鉄				
石蓋土塚			N 32° E										

第1表 各古墳一覧表

圖 版



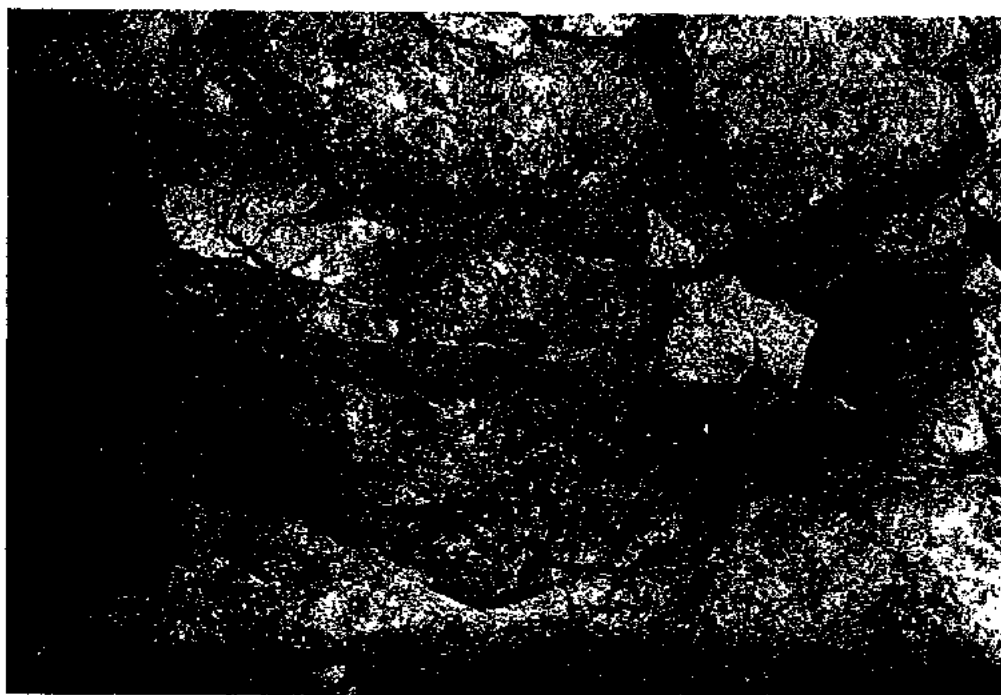
第10号墳横口部彩色



(1) 第11号填去家聚矿片彩色



(2) 第11号填去家石磷彩色



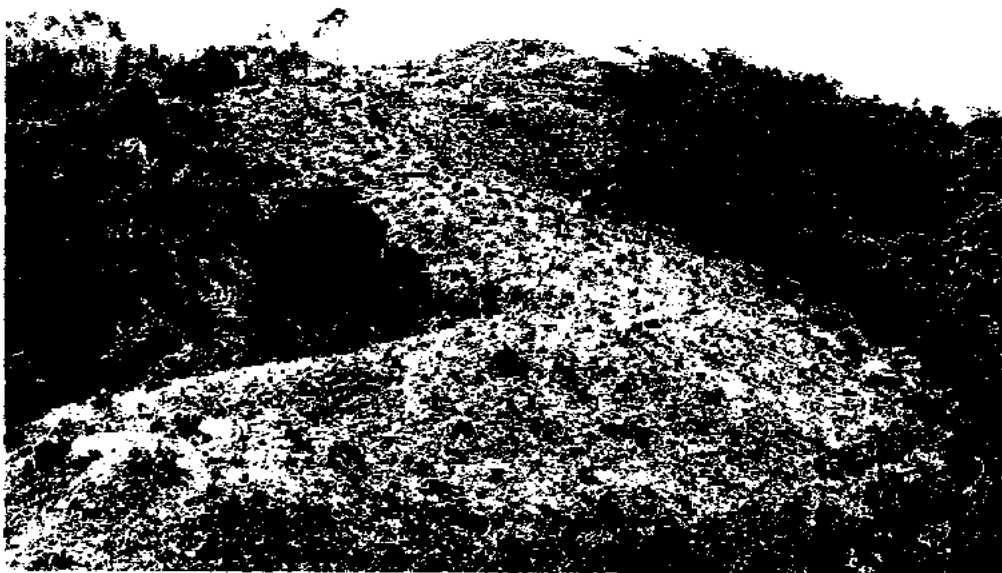
(1) 第 11号填玄室奥壁彩色



(2) 第 11号填玄室右隅彩色



(1) 遺跡全景 (西より)



(2) 遺跡全景 (東より)



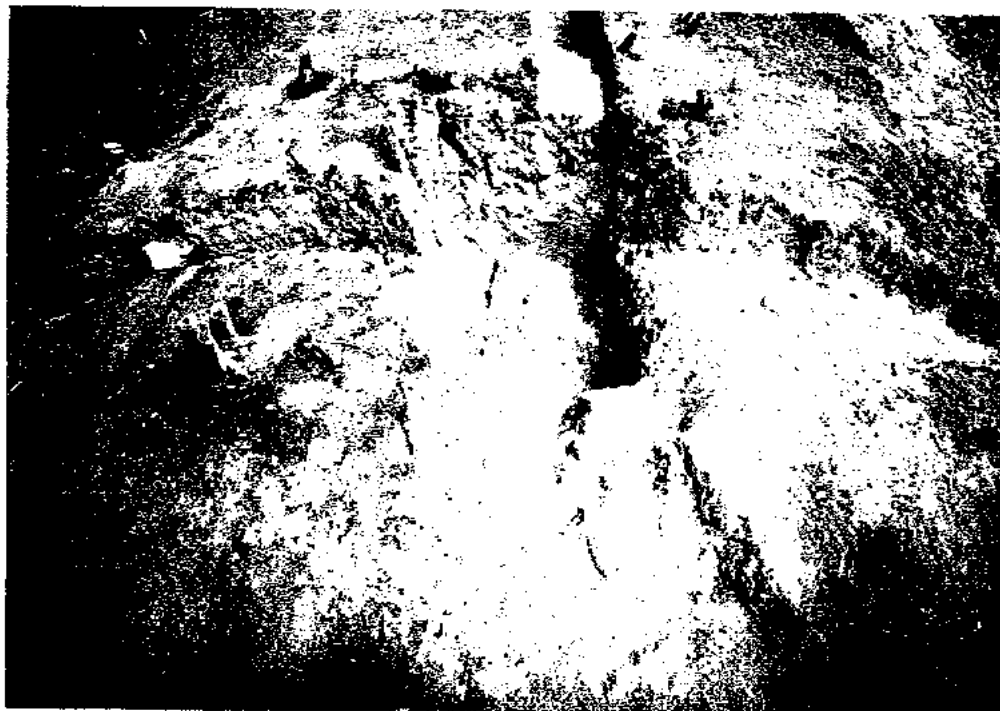
(1) 第 1・2号墳全景 (調査前)



(2) 第 2号墳全景 (調査前)



(1) 第 1 号墳全景



(2) 第 2 号墳全景



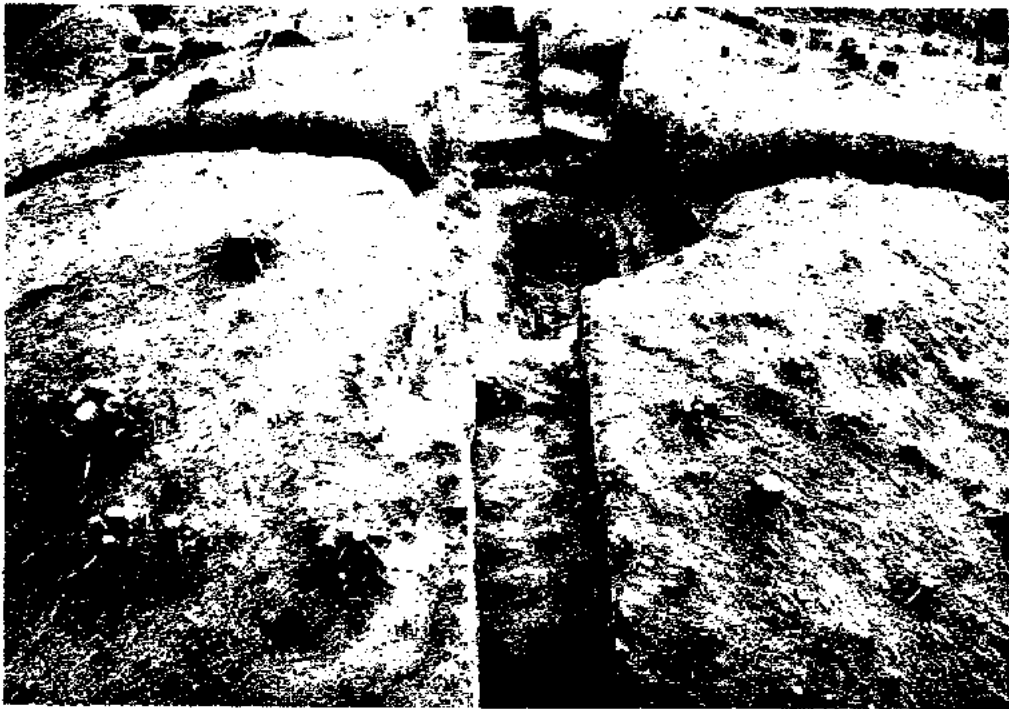
(1) 第3号墳全景



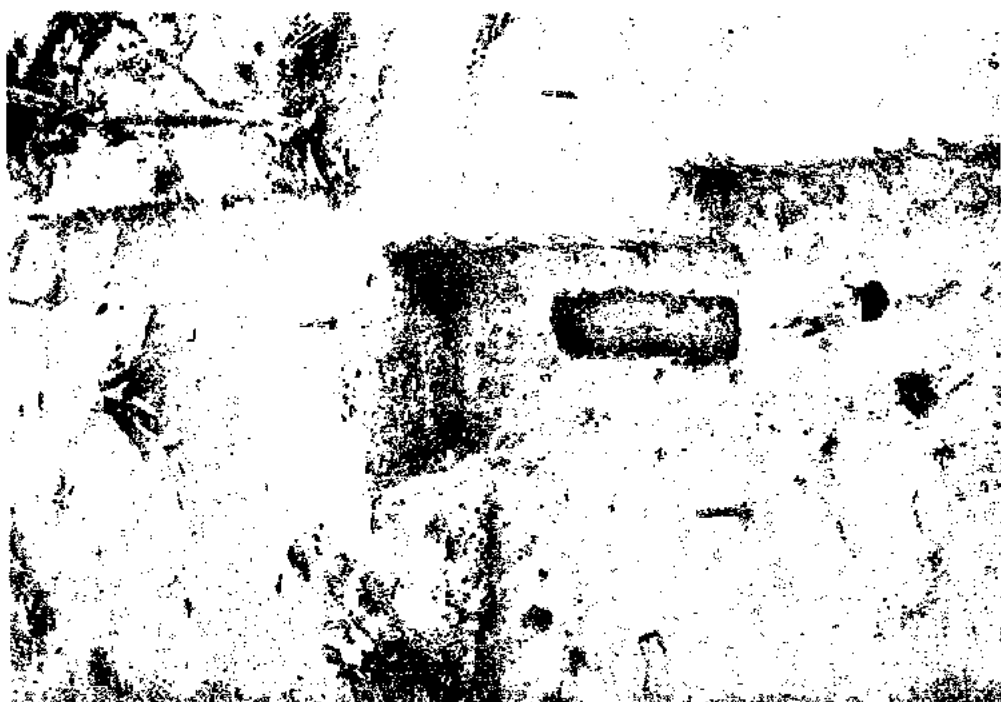
(2) 第3号墳玄門



(1) 第 4 号墳全景 (調査前)



(2) 第 4 号墳全景



(1) 第 5 号城全状



(2) 第 5 号城主体部



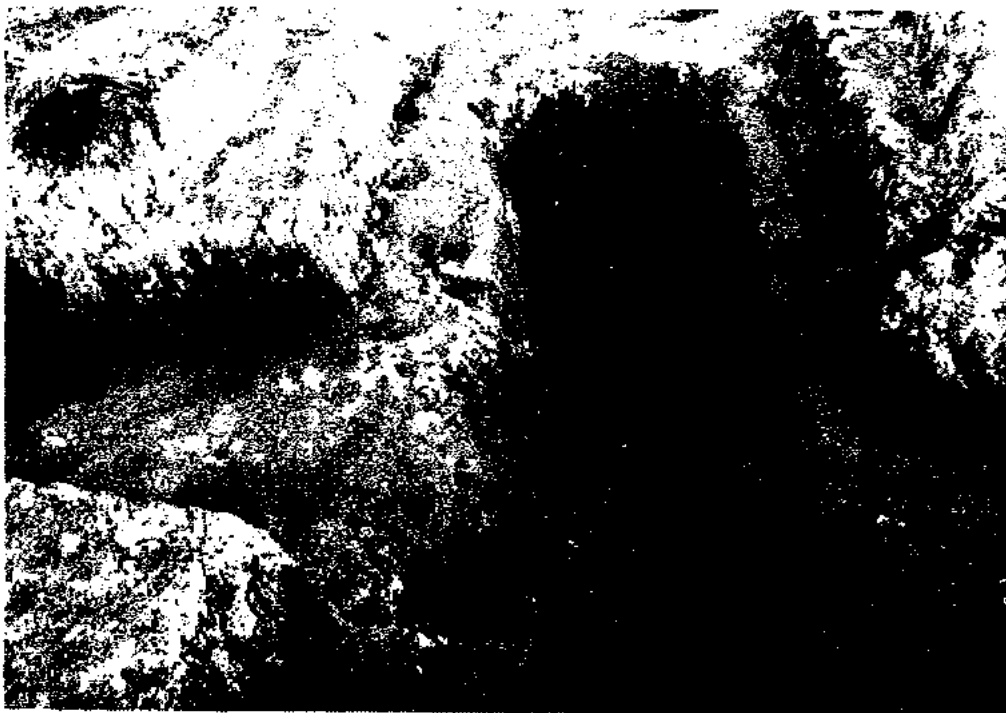
(1) 第 6 号墳全景



(2) 第 6 号墳主体部



(1) 第7～9号墳全景(調査前)



(2) 第7号墳主体部



(1) 第8号墳主体部



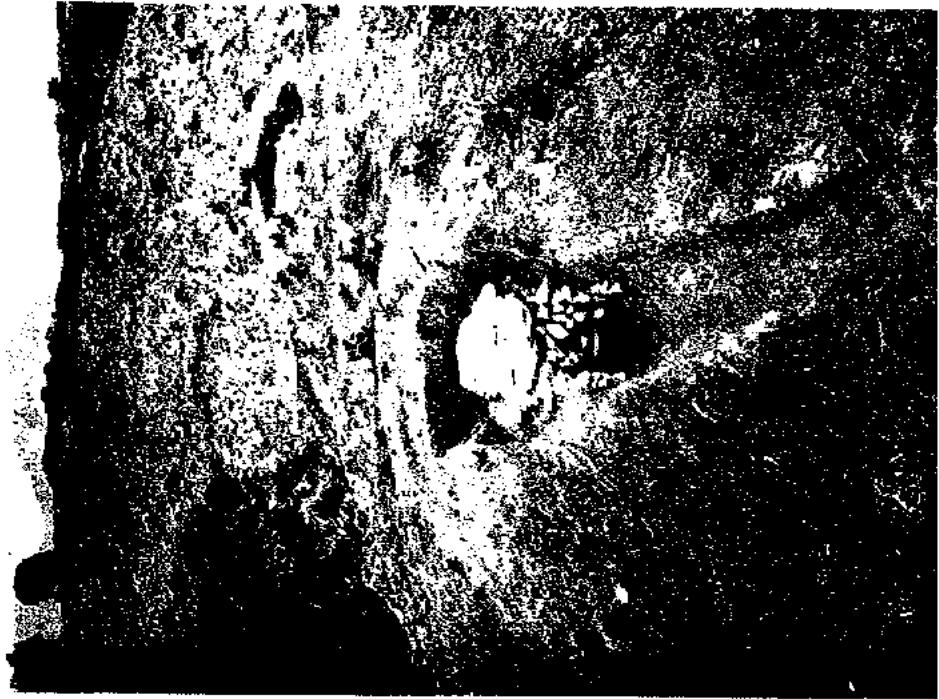
(2) 第9号墳主体部



(1) 第9号墳主体部内遺物出土状況



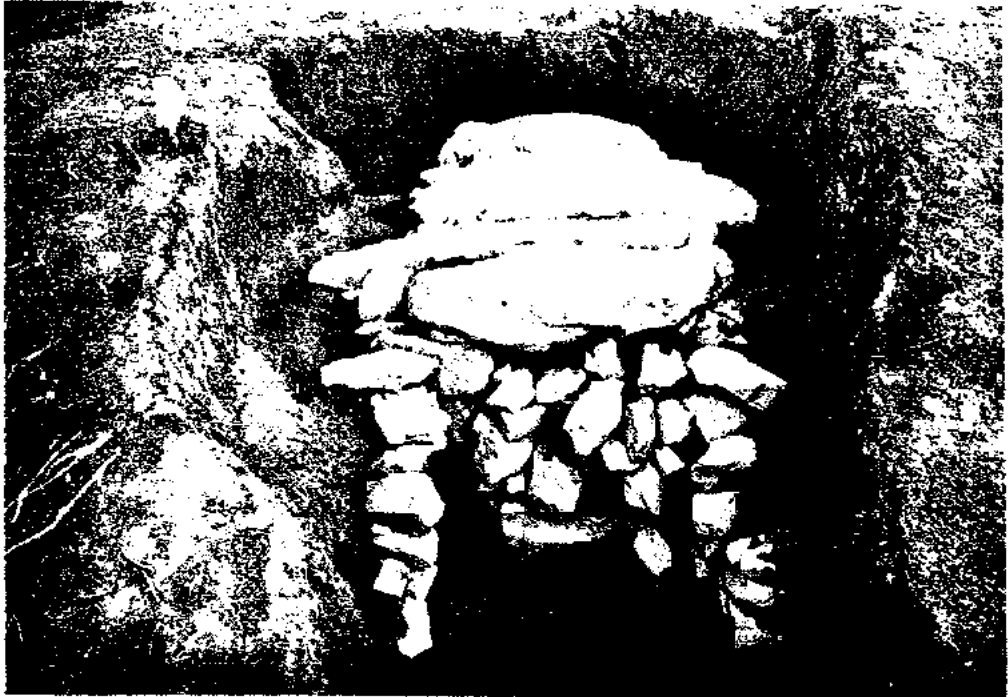
(2) 第9号墳鉄刀出土状況



(1) 第10号墳金鉢



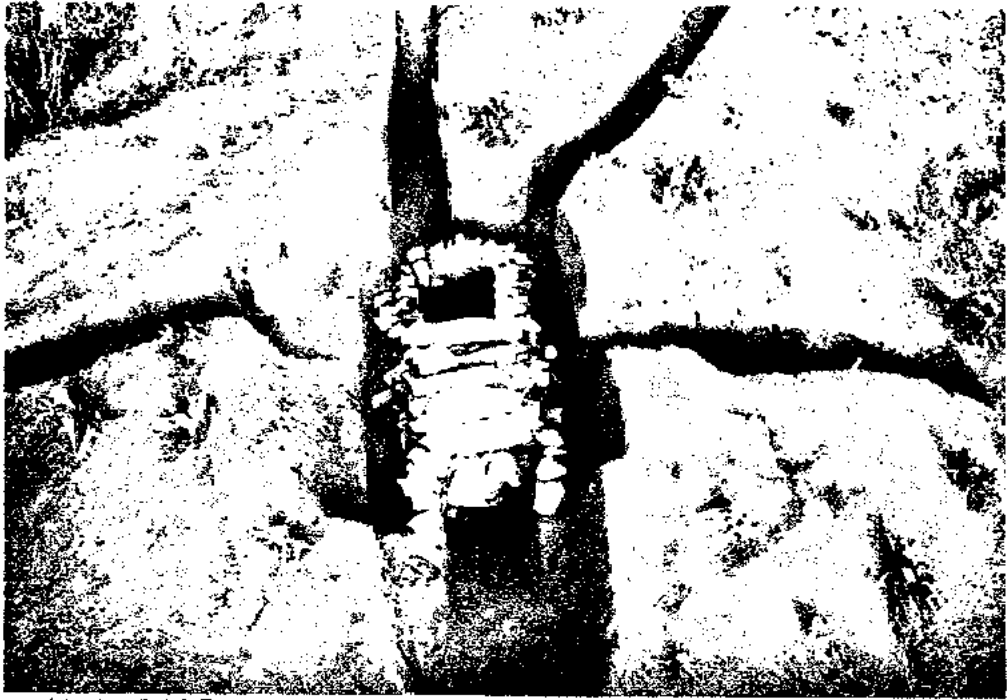
(2) 第10号墳玄門と附露石



(1) 第 10 号填石室全景



(2) 第 10 号填石室石



(1) 第 11 号墳全景



(2) 第 11 号墳閉塞石



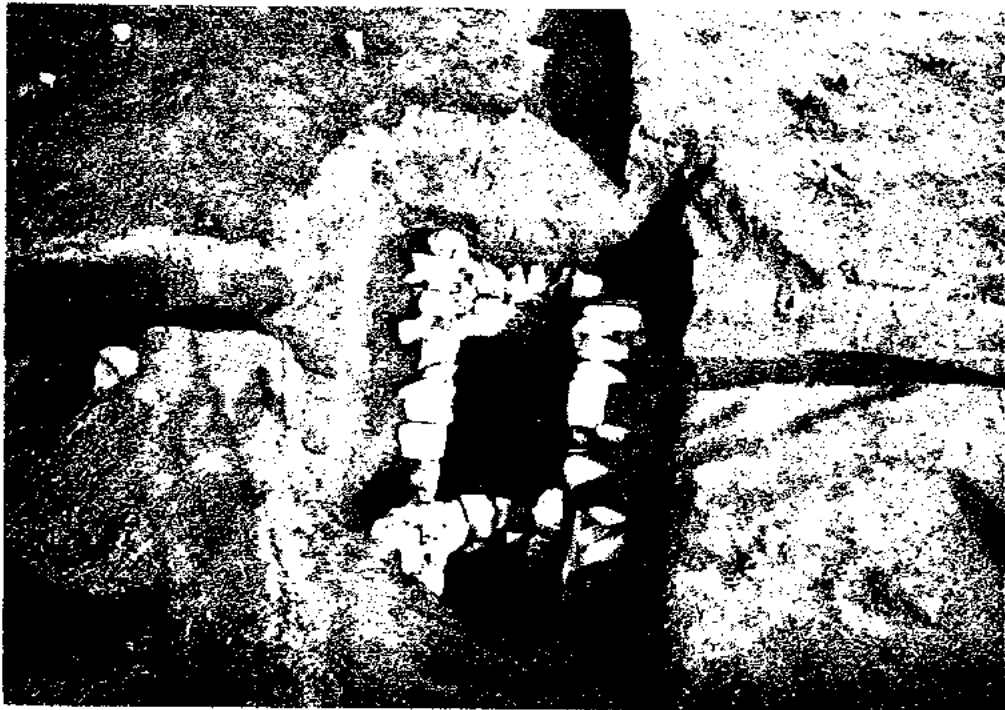
(1) 第 11 号墳玄門と附家石



(2) 第 11 号墳石脚壁と玄門脚



(1) 第12号墳全景 (調査前)



(2) 第12号墳全景



(1) 第 13号墳全景



(2) 第 13号墳玄室内人骨出土状況



(1) 第13号墳玄室内人骨と鉄器出土状況



(2) 第1・2号小石室全景



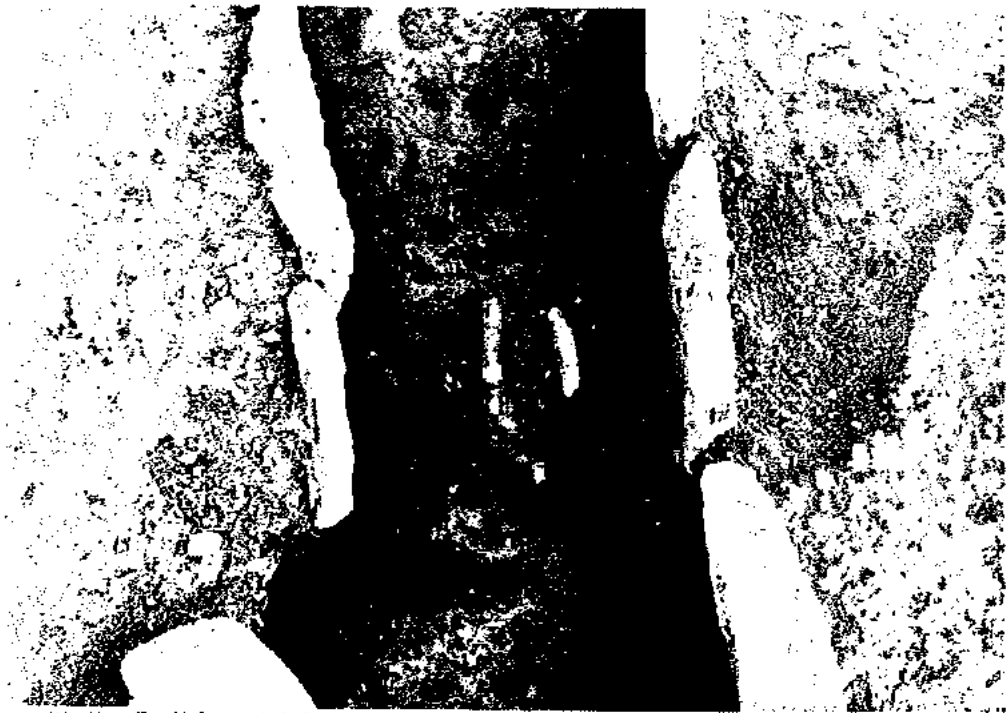
(1) 第 1 号小石室全景



(2) 第 2 号小石室全景



(1) 第 1 号石棺内铁器出土状况



(2) 第 1 号石棺内人骨出土状况



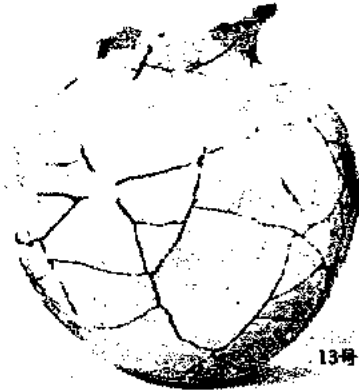
6号墳



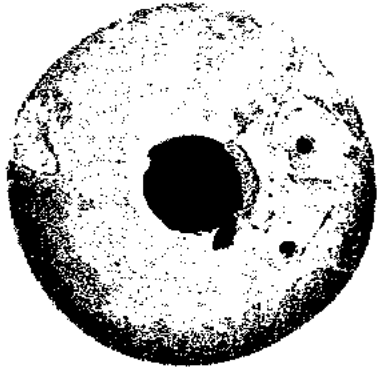
8号墳



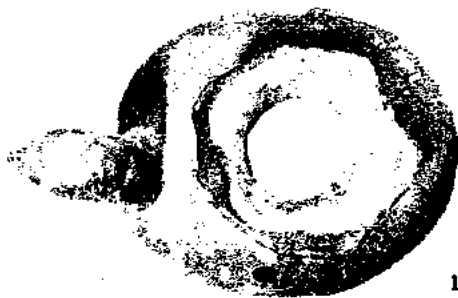
7号墳



13号墳



12号墳



12号墳



各古墳出土土師器・須恵器



1号



10号



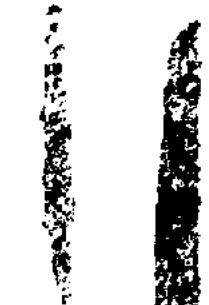
11号



13号



8号



1号小石室



2号



3号

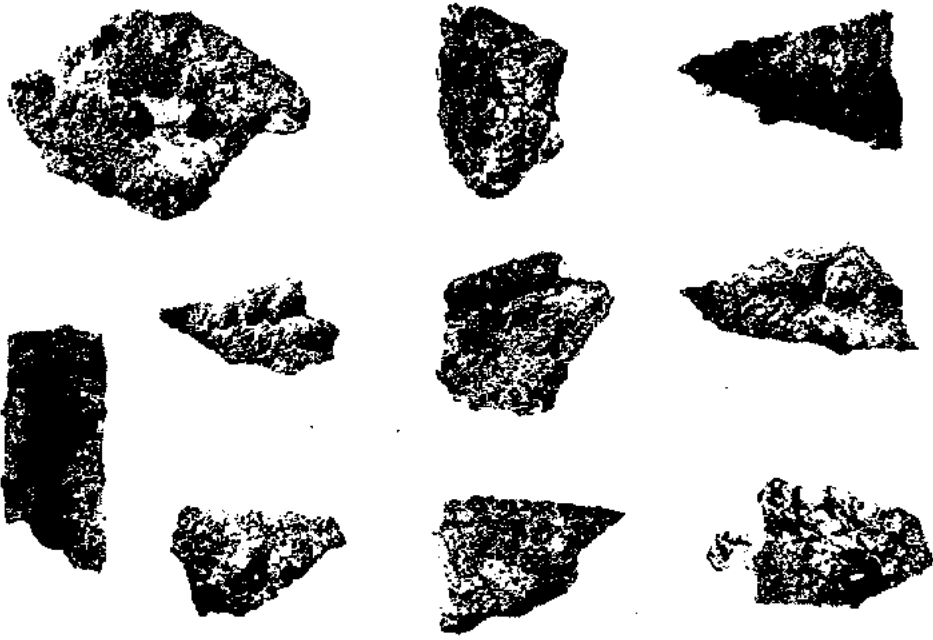


9号



13号

各古墳出土武器・装身具



(1) 第6号墳出土土師甲剝板



(2) 第9号墳出土三葉環 (左レントゲン写真・九州大学文学部 美学美術史研究室 林崎价男撮影)

宗像町文化財調査報告書 第2集

昭和54年3月31日

発行 宗像町教育委員会  
福岡県宗像郡宗像町東郷

印刷 釜瀬印刷  
福岡県宗像郡宗像町福元